教会はキリストの体

宣教第2世紀へ向けてエフェソ書に学ぶ

日本福音ルーテル教会宣教百年
1893
1993

日本福音ルーテル教会宣教百年記念事業室編

教会はキリストの体

―宣教第二世紀へ向けてエフェソ書に学ぶ―

日本福音ルーテル教会宣教百年記念事業室編

（聖書の学び手引書）

目次

序　江藤　直純　5

単元一　天と地をつらぬく教会（一章1〜14節）　森　勉　15

単元二　キリストの満ちあふれる教会（一章15〜23節）　重野　信之　27

単元三　神の恵みに生きる教会（二章1〜10節）　大柴　譲治　38

単元四　キリストの平和を実現する教会（二章11〜22節）　大柴　譲治　53

単元五　伝道する教会（三章1〜13節）　太田　一彦　65

単元六　祈りにあふれる教会（三章14〜21節）　重野　信之　79

単元七　一致によって成長する教会（四章1〜16節）　太田　一彦　91

単元八　キリストに倣う教会（四章17節〜五章20節）　森　優　107

単元九　仕え合う教会（五章21節〜六章9節）　森　優　120

単元十　戦う教会＝わたしたち（六章10〜24節）　森　勉　138

あとがき　151

参考文献　聖書地図　154

エフェソ書手引書　序

一

教会とは何か、と改めて問われると、たいていのクリスチャンは戸惑われるのではないでしょうか。なぜなら、それはあまりにも分かりきっていることだから。自分が属しているあの〇〇教会のことであるし、ときにはその建物のことだし、そこに集まっている人々だということも知っているし、聖書的な表現で言えば「神の家族」とか「キリストのからだ」であることも承知しています。

答を全部知っていると思えば、それでもなお尋ねるというのはさして意味のあることには思えないのは当然です。けれども、私たちが知っている「答」は、ほんとうに私たちの信仰生活の力になっているでしょうか。その「答」が私たちの生き方を方向づけたり、支えたり、励ましたりしているでしょうか。そもそも、その「答」はほんとうに神さまのみ旨にかなっているのでしょうか。

二十世紀、とくにその後半は世界の教会で、「救い」とは何か、「宣教」とは何かが改めて問い直され、またそれとの関連で「教会」とは何であるのかが真剣に論じられたのです。その背景には、この世界の宗教離れがいっそう進んでいき、はっきり言うとキリスト教がなくても世界はちっとも困らないようだったり（だから、信徒数は欧米でも減少してきたし、日本をはじめいわゆる宣教地で少しも増えないし）、また逆に、キリスト教以外の伝統的な宗教は依然として力を持っているようだし、新しい宗教は多くの人々を惹きつけてやまないものがあるようです。

だからこそ、キリスト教会自身が本気で自問しているのです。そのとき、もしもこれらの問いに対して確信をもって答えられるものを私たちが見出しえないなら、もしも持っていなければ、信仰生活も生き生きしたものではありえないし、ましてや伝道に熱もはいらないし、当然のことながらその成果も期待できないでしょう。

私たち日本福音ルーテル教会もまたこの問いを問います。社会学的な問いの立て方もありますし、歴史的な検討の仕方もあるでしょう。それらも必要ですが、「み言葉に立つ教会」であることを願っている私たちとしては、何よりもまず「聖書」自身に聴いていきたいと思います。聖書に問い、また聖書に問われながら、救いとは何か、宣教とは何か、そして教会

とは何かということへの答を求めていきます。

ご承知のとおり、福音書の中には「教会」という言葉はごくわずかしかでてきません。それも当然でしょう、教会はイエス・キリストの十字架の死と復活に基づいて誕生したものなのですから。ですから、私たちの「教会」を求めての聖書の学びは、初代教会の宣教の歴史である「使徒言行録」と、その中で生み出されていった多くの「書簡」、ことにも初代教会最大の伝道者、使徒パウロの手紙に取り組むことによってなされていくのがふさわしいでしょう。

日本福音ルーテル教会の宣教百年という大切な節目を間近に控えて、私たちは全国の教会こぞってこの問い、「教会とは何か」という問いを携えて聖書を学びたいと思います。そこで得られるしっかりした土台の上に立って、宣教第二世紀へと進んでいきましょう。聖書の中でも、とくに「エフェソ書」が選ばれました。これによってパウロの教会理解をじっくり学びましょう。

二

私たちが日本でキリスト教だ、伝道だ、という話しをするとき、ついつい「キリスト教は

外国の宗教だから」とか、「クリスチャンは圧倒的に少数派だから」などと、いささか弁解がましいことを言いがちです。けれども、考えてみますと、パウロの時代に、キリスト教徒はもちろん圧倒的な少数派でしたし、広大なローマ帝国の中で、しかもギリシャ・ローマ文化（ヘレニズム）世界に住む人々にとって、ガリラヤの片田舎から起ったキリスト教などというものは、まるで「外国の宗教」だったわけです。そもそも極めて人間的な多神教の神々の世界と、唯一絶対の一神教とでは共通点などありません。いくらユダヤ教の伝統の中から出てきたといっても、ユダヤ教そのものがユダヤ人だけの宗教だったわけですから、ローマ帝国内に存在していたとしても、これはまるで異質な「外国の宗教」であったと思われても仕方ありません。

そのような文化的・宗教的風土の中で、「異邦人」、つまり非ユダヤ人を対象にパウロたちは福音の伝道をしたのです。さぞかし大変だったことでしょう。

ところで、このエフェソという町はどのような町だったのでしょうか。

エフェソは、現在のトルコの西端に位置し、当時は一説では人口も二十五万人を擁するローマ帝国の東部地方では最有力、しかも古くから繁栄していた都市で、アジア地方（トルコ）の首都であり、政治・文化の中心地、アジアの諸都市に通じる交通の要所、大商業都市

でした。さらには、かの有名な女神アルテミスの神殿があるなど宗教の町でもありました。住民の多くはギリシャ人であったといいます。

この都市で、パウロは第三伝道旅行のとき約三年滞在し、教会を設立、育成しました。この地方の中心的な教会に発展していったそうです。

この教会を、現在の日本とただちに比較してよく似ていると結論づけるのはいかにも早すぎますが、いくつもの類似点は見ることはできると思います。

このようなエフェソの信仰者の群れに宛てられたこの手紙は、古い写本には「エフェソにある」という文字が欠けているものがあるそうです。これはその地方にある諸教会で回覧したことを示しているのでしょうが、また、この地名の欄に私たちの教会のある町の名を入れることもできるでしょう。

三

ところで、私たちはこの「エフェソ書」を学ぶ際に、とくに教会とは何か、その本質と実際とは何かを考える手掛かりを求めていこうとしています。聖書は、どの箇所でもそれぞれの思いを持って臨むとき、さまざまなことを語りかけてくれるものですが、教会という視点

をもって読めばどうでしょうか。本文に入る前に、先取りして全体像を見ておきましょう。

冒頭の挨拶では、パウロの短い自己紹介の中に「使徒」であることの根拠が示されており、また手紙の名宛人である教会員たちは「聖なる者たち」と呼びかけられています。私たちも「聖なる者たち」なのでしょうか。そうなら、どういう意味でそうなのでしょうか。

一章3節からは神への賛美が始まりますが、「お選び」「前もってお定め」「秘められた計画」「御心」といった言葉が繰り返し出てきます。私たちの側から見た（私たちの理解はいつもこうですが）求道、信仰の道筋とは別の、神の側から見た、大きな流れが示されています。神ご自身がもっておられる神の国実現へのご計画（救済史といいます）と、そのなかでの、先に選ばれた者としての神の民、すなわち教会の位置づけを確かめておきましょう。

一章15節から23節ではパウロの祈りが書かれていますが、そこでは、すべてを支配されるキリストと、その体である教会という理解がここで明確に出てきます。二章にはいると、いま信仰をもって生かされていることがどんなにか一方的な神の恵みの出来事であるかが描かれ、キリスト者、教会の拠って立つ基盤が揺るぎないものとされます。その上で「善い業」が語られます。私たちにとって「善い業」というのはいったいどういうものでしょうか。

二章11節以下では「キリストは私たちの平和」が鍵の言葉でしょう。平和はキリストがも

たらされたものであり、したがってその体である教会もまたもたらすことが期待されていることがはっきり示されています。

異邦人のためのパウロの働きを述べている三章の前半は、そのまま教会の伝道の務めを語っているというふうにとってよいでしょう。後半はパウロの祈りです。

四章以下では、それまでのいわば教理的な教えに基づいて、実践的な勧めがさまざまに展開されています。キリスト者の倫理とも、古い生き方に対する新しい人にふさわしい生き方ともいっていいでしょう。教会がこの世と変わらない面もありますが、それとは異なっている点についてパウロは記しています。

五章21節以下は、その流れの中でもとくに近年議論を呼んでいる夫婦のあり方についての勧めを通してキリストと教会の関係を述べています。

最後の段落である六章10節以下では、信仰をもつ者に悪と戦えと勧めています。今日教会が戦うべき悪とはなにか、深く考えさせられます。

四

エフェソ書の概略を見ただけで、この短い手紙の中で、パウロがいかに力を込めて教会に

ついて語っているかが分かります。

さあ、これからは私たち自身の目で、耳で、指で聖書に直接触れ、心から声に出して読み、考え、語りあいましょう。

しかし、ここでもう一度、聖書を学ぶ基本的な姿勢を思い起しましょう。ルターは、神学するために必要なこととして、「祈ること、黙想すること、試練にあうこと」を挙げました。祈ることとは、心を自分の思いで満たさないで、神に向かって開くことでしょう。黙想することは、必ずしも目をつぶって静かに正座することという意味ではなく、聖書の言葉を思い巡らすことです。試練にあうことは、現実の生の只中に身を置いて、決して逃避せず、現実からの問いかけに身を晒しながら、キリスト者として、人間として生きることそのものです。それこそが聖書を学ぶ方法、神学する方法だというのです。私たちもその例に倣いたいものです。

第三伝道旅行の途中、ミレトスにエフェソの長老たちを呼び寄せて語ったパウロの別れの言葉を贈ります。「今、神とその恵みの言葉とに、あなたがたをゆだねます」（使徒言行録二〇・32）。注意して下さい。あなたがたに、神とその恵みの言葉をゆだねると言っているのではありません。その逆なのです。聖書を学ぶときも同じ心構えが必要だと思います。私た

ちが知識の限りを尽くして聖書の言葉をいじるのではなく、私たちを聖書の言葉にゆだねるとき、福音の真理が私たちに示されてくることを信じましょう。

この教会の友との神の言葉の共同の学びが、私たちの信仰生活を思いとことばと行いとにおいて、豊かにしてくれます。さあ、聖書をひもときましょう。

＊　＊

本書におきましては「聖書　新共同訳」を用いました。最新の聖書学の成果に基づき、教会一致運動の精神に支えられ、これからの時代を生きる人々に広く読んでいただけるようにとの願いをこめて刊行されたのが「新共同訳」で、日本福音ルーテル教会でも信仰と職制委員会から礼拝での朗読聖書としてふさわしいとの承認を得ています。

編者として

宣教百年記念事業室長

江　藤　直　純

単元一　天と地をつらぬく教会（一章1～14節）

はじめに　この単元の構成

この単元は以下のように分けてよいです。

一　手紙の挨拶　序論問題　（1～2節）

二　神賛美の歌　（3～14節）

(a)　天のあらゆる霊的な祝福　3節

(b)　神の選び　4～6節

(c)　十字架の血による救い　7節

(d)　神の秘められたご計画　8～10節

(e)　わたしたち神の家族　11～14節

手紙の挨拶　序論問題（一・1～2）

本書の序でエフェソについて若干触れていますが、もう少しエフェソ教会の背景を学んでおく必要があります。誰が・誰に・いつ・どこで・何のために、この手紙を書いたのかが問題になります。これを序論問題と言います。この手紙の序論問題は使徒言行録によって知ることができます。

誰がこの手紙を書いたのですか。神のみ心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロが著者ですが、パウロではないという意見もあります。それは後で学びますが、エフェソの町に約三年も滞在して伝道したパウロの手紙にしては、他のパウロの手紙に比べて個人的な消息や感情のこもっていない書き方がなされているためです。しかし、教会はずっと歴史の中で、パウロの手紙として読んできました。さらに、コロサイの信徒への手紙、コリントの信徒への手紙の書き出しはエフェソの信徒への手紙と同じですし、パウロの書いたものと理解して差し支えありません。

それよりも、「神の御心によって使徒とされた」という表明が大切です。わたしたちがキリスト信徒とされたときを、どのように言い表しているでしょうか。自分の決心によって信徒となった？　両親が知らぬ間に洗礼を受けさせていた？　あの牧師や宣教師によって信徒になった？　あの人によって、あの出来事によって洗礼を受けた？　具体的にいろいろある

でしょう。それらをプラスにもマイナスにも含めながら、神のみ心が私たちを使徒として、信徒として立ててくださるのです（ローマの信徒への手紙、ガラテヤの信徒への手紙などの冒頭の言葉を参照）。

誰にこの手紙は宛てられているのですか。受取人の問題です。「エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たち」へ宛てられています。エフェソの町はパウロも伝道したところです（エフェソの信徒への手紙を学ぶ背景として、使徒言行録の関係記事を見ておくことはとても大事です。また聖書地図とりわけパウロの宣教旅行図を用意してください）。第二回宣教旅行の最後の場所、コリントに一年六ケ月とどまって伝道したパウロは（言行録一八・11）、コリントで出会ったアキラとプリスキラ夫妻（同一八・1～2）を同道して、第二回宣教旅行の帰途、コリントからケンクレアイを経て、海路エフェソの町に入りました（同一八・18～22）。エフェソの人々はもうしばらく滞在するように願ったが、パウロはアキラとプリスキラ夫妻をそこに残して、再会を祈り求め、海路エルサレムに向かいました。

パウロは第三回宣教旅行（同一八・23以下）に出かけますが、約束通りエフェソを訪ねることになります。パウロのエフェソ到着以前にアポロが宣教していました（同一八・24

〜26)。アポロのキリスト教は聖霊なしの教えであったようです(同一九・2)。アポロはエフェソでアキラとプリスキラから正しいキリスト教の教えを学んでいます(同一八・26)。信徒が教職に教えたという興味深い箇所であります。こうしてアポロがコリントに去った後(同一八・27)、パウロはエフェソに到着し、伝道が開始されました(同一九・1〜二〇・1)。この使徒言行録一九章はエフェソ教会の背景を知る上でどうしても読んでおかなければなりませんし、何のためにこの手紙が書かれたかの答を得られるでしょう。それは今日の教会(私たち)の信仰の課題にもつながる問題です。パウロのエフェソ滞在は、三ケ月間(同一九・8)、二年も続いた(同一九・10)、しばらくアジア州にとどまって(同一九・22)などの言葉から、三年間近くであったと思われます。

エフェソ教会の信徒たちは「聖なる者たち」と呼びかけられています。「聖なる者」の「なる」を取りますと「聖者」となりますが、「聖なる者」は決して聖者の意味ではありません。聖は清潔とか立派とか人格者というようなことではありません。聖は何よりも神に属する性質です。聖なるお方は神のみです(イザヤ六章)。聖なる神がわたしたちを聖なる者と認め宣言してくださるのです。その理由は人間の側にはありません。「召されて聖なる者となったローマの人たち」(ローマ一・7)、「キリスト・イエスによって聖なる者とされた

人々」（一コリント一・2）などとあるように、神とキリストが人々を聖にするのです。「キリストとかかわりなく、神を知らずに生きていた」（エフェソ二・12）異邦人が、キリストによって聖なる者と呼ばれるのです。異邦人である点は、わたしたち日本人も同じです。そういえば、本書の序に記されているように、「エフェソにいる」という地名を、わたしたちの町の名にしたら、この手紙はパウロからわたしたちへの手紙ということになります。

いつ、どこで、この手紙は書かれたのですか。三・1や四・1を見ると「囚人となっているわたし」という表現がありますから、パウロが囚われの身におかれていたローマの獄中から書き送ったものとされています。六・20参照。

何のために、この手紙は書かれたのですか。執筆動機とか内容の問題です。前述した使徒言行録の宣教旅行の記事の中で、エフェソ教会及び近辺のアジア州の諸教会の状況はある程度明らかになっています。パウロの伝道の前にアポロの伝道がなされたことは既に述べました。アポロは聖書（この場合は旧約聖書）に詳しく、雄弁家であり、イエスのことについても熱心に正確に教えていたとありますが、アキラとプリスキラ夫妻から正しいキリスト信仰を教えられなければなりませんでした。パウロのエフェソ到着前にアポロはアカイヤ州のコリントに行き、熱心な伝道活動をしたようですが、彼の知識と雄弁と熱心は逆にコリント教

会に分裂を引き起こしたことが知られています（一コリント一・10〜13、三・3〜7、三・21〜23、四・6）。知識と熱心と雄弁でなく、祈りがたいせつです。

パウロにとってエフェソの教会はとりわけ忘れがたい教会であったようです。そのことはこの手紙の中に十分表れていませんが、彼は第三回宣教旅行の帰途、ミレトスの港に着いたとき、エフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せ、声涙ともに下る別れの訓戒を述べています。使徒言行録二〇・17以下です。ここもまたしっかり読んでおいてほしいところです。エフェソ教会の背景として教会の在り方について学べるところだからです。

神賛美の歌　（一・3〜14）

(a)　祝福　3節

この3〜14節は、原典では長いひとつの複雑な文章です。日本語に翻訳するとき、いくつにも区切って訳してあります。この箇所のほとんどの文の主語は神です。「あなたがた」や「わたしたち」が主語である場合も、神が働きの主体です。

次にこの箇所の鍵となる句がいくつか出てきます。まず第一は「キリストにおいて」、「御子において」、「キリストによって」、「御子によって」、「キリストのもとに」などの句です。

全部で十一回出てきます。パウロはこの「キリストにおいて（エン・クリストー）」という句を最もよく使っています。神の働きは、御子イエス・キリストにおいてなされていることを明確に語るのです。キリスト中心なのです。

第二は、「たたえる」という言葉が四回出てきます（3、6、12、14）。しかし、3節の「ほめたたえる」と6、12、14節の「たたえる」は違う言葉なのです。3節の「ほめたたえられる」という単語は、「祝福する」という語と同じ語が用いられ、しかも3節には三回も出てくるのです。直訳すると「わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で祝福してくださった主イエス・キリストの父である神に祝福あれ」となります。これはおかしな言葉です。人間が神を祝福することは考えられません。神が人間を祝福されるのです。神の祝福に感謝と賛美を捧げる意味で、「ほめる」「たたえる」と強調されているのです。6、12、14節には、「たたえる」が繰り返されるように、3～14節の段落は神賛美が中心です。その意味で3節はこの段落の全体にかかる文と理解してよいでしょう。「天のあらゆる霊的な祝福」というのは、天も地も神の創造の世界であり、神のみが持っておられるすべての霊的な祝福と理解しておきましょう。なぜ、神を賛美するのですか。その理由をパウロは以下のように述べるのです。

(b) 神の選び　4～6節

4　神はキリストにおいて、わたしたちを、天地創造の前に愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、お選びになりました。

5　(神は)、イエス・キリストによって、(わたしたちを)、神の子にしようと、御心のまに前もって、お定めになったのです。

6　神が、その愛する御子によって、(わたしたちに)、輝かしい恵みを、与えてくださった(そのことを)わたしたちがたたえるためです。

このように側線を引いてみたのは、神がすべての行為の主体であるということです。しかも、父なる神と御子キリストがひとつである神として、選び、定め、恵みを与えるお方なのです。神の選びは、「天地創造の前に」なされたといいます。これは時間的な順序をいっているのでなく、人間の理解や行いを超え、時間や空間を超えた、神の愛のご決意だといえます。「私は子供に洗礼を受けさせません。子供が自分で決断し、選び取れるようになることが絶対です」という親がいます。しかし、それでよいのでしょうか。信仰には自由な決断と自発性が必要なことは当然ですが、それらを超えた神の先行する選びと決定と行動があるの

です。人間の決心や選択は歴史や時間の中で行われるものです。だからそれはうつろいやすいし、絶えず揺れ動き、絶対のものではありません。自分自身の生活体験からいえば聖なる者でもありませんし、汚れなき者でもありません。これで神の子だろうかという煩悶があります。罪人なのです。しかし、神はキリストにおいて聖なる者、汚れなき者、神の子として認めてくださるのです。私たちは罪人だけれども、義人なのです。人生の目的は神のみ心を知り、それに従って生きることです。

(c)　十字架の血による救い　7節

「神が愛する御子によって与えてくださった恵み」とは、十字架の血による贖（あがな）いです。贖罪論というキリスト教の大切な教理です。「贖い」という言葉は、奴隷や捕虜や人質を解放するために身代金を払うことを意味していました。「罪の奴隷」（ヨハネ八・34）、「罪の法則のとりこ」（ローマ七・23）である人間を解放し罪を赦すためには、身代金くらいでは済みません。血が流されなくてはなりません。それも小指をつめるくらいの落し前ではありません。いのちが捧げられる贖いです。神の豊かな恵みとは、自分に都合の良いことばかりを考えるような恵みではありません。それは骨がばらばらになるほどにおそろしい恵

みです。聖なる畏敬を伴う賛美にならざるをえません。「御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」（言行録二〇・28）なのです。

(d) 神の秘められたご計画　8～10節

聖書は人間と世界に対する壮大な神の計画、しかも救いの計画が記された書物です。「秘められた計画」という言葉は英語の聖書では「ミステリー」と訳されています。六章19節では「神秘」と訳されており、それは「福音という神秘」なのです。「あなたがたの内におられるキリスト」（コロサイ一・27）であり、三章5～6節に記されているように、異邦人もイスラエルもキリストにおいて一つとなることであります。

一つにまとまる、これは美しいスローガンです。しかしこれは地にあるものの一致や連帯のことではありません。天と地とが、永遠と時間とが、イスラエルと異邦人とが一つにまとめられることなのです。「み心の天に成るごとく、地にも成らせたまえ」という祈りの実現なのです。神のみ心は天地万物の創造以前に定められていました。天地万物の創造、とりわけ人間を創造し、み心の成就を求められました。しかし人間の堕罪、イスラエルの選び、律法の賦与、そしてキリストの贖いという神の救済史は、神の秘められた計画として、誰にで

も自然に解るものではなく、神の与えてくださる知恵と理解力によらなければなりません。それこそ聖霊の働きであり、14節につながります。

(e)　わたしたち神の家族　11～14節

この段落は、11、12節の「わたしたち」がユダヤ人キリスト者、13節の「あなたがた」が「異邦人キリスト者」、14節の「わたしたち」が両者含めた「わたしたち」であります。この背景としてエフェソ書では二章11節以下が学ばれるとよいでしょう。イスラエルが「前もって定められ、約束されたものの相続者」として選ばれたのは、彼らの人徳や功績のためではありません。神のご計画がキリストにおいて実現するためです。

エフェソ教会の信徒である異邦人キリスト者も、パウロから「真理の言葉、救いをもたらす福音」を聞いて信じるようになりました。真理の言葉を聞いて、信じて、聖霊の証印を押されるというのは、洗礼を受けるという意味でありましょう。既述したように、パウロとエフェソの信徒の間で、聖霊による洗礼の問答がなされています。使徒言行録一九章1～6節参照。

神は天地万物を創造し、これを人間に委ねられました。しかし人間は神のみ心に背きまし

た。いま、再びイエス・キリストによって、神のご計画の中に受け入れられたのです。その保証として聖霊が与えられました。保証は手付金という意味です。商売では手付けを打てば、その品物は条件を満たせば自分のものです。自分のものでありながら自分のものでないという状況です。「既に」と「未だ」との中間状態にあって、完全な贖いを待つのです。

（森　勉）

一緒に考えましょう

わたしたちの百年は、そしてわたしの生涯は、神の計画の中にあるものとして受けとれるでしょうか。

単元二　キリストの満ちあふれる教会（一章15～23節）

はじめに　この単元の構成

一　とりなしの祈り（15～19節）
二　キリストの支配（20～21節）
三　キリストの体としての教会（22～23節）

とりなしの祈り（一・15～19）

この単元は、「こういうわけで」という言葉で始まります。それは、3節から14節までに書かれていることを指しています。そこでは、神が、キリストにおいて、わたしたちを選んでくださったこと、したがって、選ばれた者たちの生活は、絶えず「神の栄光をたたえる」ことになる、ということです。「神の栄光をたたえる」といっておいて、パウロは、15節から19節で、「とりなしの祈り」を展開します。これは、論理の飛躍のように思われますが、

そうではありません。パウロは、祈りは神との関係から出てくる、と考えているからです。

わたしたちは、「教会の祈祷会が振るわない」とか、「わたしたちの教会は祈りに熱心ではない」と言ったりしますが、その原因はどこにあるでしょうか。パウロによると、それは、わたしたちの熱心さが足りないからではなく、神の栄光をたたえることが足りないから、ということになります。祈りは、神に対する信仰が明確にされ、神の栄光をたたえるときに生まれてくるのです。

パウロは、「祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています」（16節）といいます。「祈りの度に」、「絶えず」という言葉遣いからして、パウロがどんなに繰り返し祈っていたかがわかります。祈りは霊的呼吸をすることだといわれます。わたしたちが呼吸をすることをやめれば、たちまち窒息してしまうように、絶えず祈ることによって神との関係を保つことができます。パウロは、絶えず祈りをしていました。そこへ、「あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き」（15節）、あらためて神の栄光をたたえるのです。

17節から19節において、パウロは、この祈りの目的を書いています。それは、「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示の

霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように」（17～18節）ということです。「啓示」は神がご自身を現わしてくださることで、「知恵」も神が誰であるかを深く知ることのできる特別の導きです。パウロの祈りの目的は、エフェソの信徒たちに、神が誰であるかを深く知ることのできる知恵と啓示が与えられることです。そのために、パウロはその際、「主イエス・キリスト」と「御父」と「霊」の、いわゆる「三位一体の神」に言及します。ここでは、栄光の源が御父、栄光は御子イエス・キリストによって現わされ、神を深く知らせるのが御霊ということになります。それにしても、普通には、神が知恵と啓示の霊を与えてくださるように、といえばよさそうなものを、どうしてパウロはことさら「三位一体の神」まで持ち出すのでしょうか。それは、信仰は神と人間との人格関係ですから、どんな神を信じるかが大切だからです。たとえば、結婚の相手が誰であるかによって、それぞれの人生や生活の内容に大きな違いが出てくるように、どんな神を信じるかによってわたしたちの信仰生活は決定的に違ってきます。

信仰者が神を深く知り、心の目を開かれることによって、さらに次の三つを悟ることができるようにパウロは祈ります。

①神の招きによって、どのような希望が与えられているか。

②聖なる者たちの受け継ぐものが、どれほど豊かな栄光に輝いているか。
③わたしたち信仰者に働いている神の力が、どれほど大きなものであるか。

エフェソの信徒たちの信仰と愛の成長について聞いて神に感謝の祈りを捧げたパウロですが、それとともにここでは「希望」の大切さを語ります。希望の大切さについては、あらためていうまでもありません。わたしたちは、神に希望を持つから祈るのです。

キリストの支配（一・20～21）

ここから、主語が、わたしたちから「神」に、神から「キリスト」に変わります。19節では、「力」とか、「働く」という言葉を重ねて用い、神の力がどれほど大きいかを語りましたが、それでは、その力は具体的にはどこに働くのでしょうか。神が力を現わされるのは、この世の権力者や天変地異の脅威ではなく、「キリストにおいて」現わされる、と言います。パウロは、神がキリストによって決定的な力を働かせたことがある、と言います。それは、「神はキリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせた」（20節）ことです。「死者」は罪のゆえに死んだ者です。したがって、「キリストの復活」は、その罪と死の力に勝利したことになります。その勝利のしるしが「神の右に着く」ことです。

パウロの当時の宇宙観における「天」は、地上のはるか上にあり、さまざまな層に分かれていました。天の最上層は神が住まわれる所であり、復活されたキリストもそこに座しておられます。地上と境を接する天の下層部は、特別な霊的存在の住む場所であり、そこには神に敵対する霊的存在も住んでいます。キリストが「神の右の座に着かれた」ということは、キリストが「すべての支配、権威、勢力、主権の上に」支配権を確立された、ということです。これは重大な宣言です。一口でいえば、「キリストは世界の主である」ということです。ここにある四つの権力を持つ霊は、パウロの宇宙観からいえば、天の最下位に住み、政府、支配者、公共機関などの地上の勢力圏をコントロールする超人間的存在です。キリストが、神に対立して働くこれらの勢力圏を打破し、支配権を確立されたということは、キリストを主と仰ぐわたしたちは、この世の何ものをも恐れる必要がないということになります。

しかも、この主であるキリストは、もろもろの霊力に打ち勝っただけでなく、「今の世ばかりでなく、来たるべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれた」（21節）のです。したがって、キリストは時間・空間を越えた永遠の主だということになります。「あらゆる名」については、フィリピの信徒への手紙二章9節にもありますが、人間の生活だけでなく、あらゆる領域が実質的にキリストの支配下にあるということです。わたしたちの教会は、はた

してこの自覚があるでしょうか。キリストを主と仰ぐわたしたちは、キリストの愛を示すために、世界のあらゆる領域に対して責任を負う必要があります。宣教二世紀を迎える日本福音ルーテル教会は、個人の内面の救いだけでなく、このような視点からの宣教方策の構築が求められているのではないでしょうか。

キリストの体としての教会（一・22～23）

これまで、パウロは、キリストがすべての霊的力に打ち勝って、あらゆる領域の主となられたことを語ってきました。それを総括すると、「神はすべてのものをキリストの足もとに従わせた」（22節）ということになります。それでは、なんのためにキリストはすべてのものの主となられたのでしょうか。それは、やはり人間の救いのためにということです。これまで、キリストの支配という視点から宇宙論まで展開してきたパウロですが、今度は人間の救いという観点からひとつの点に焦点を合わせます。それは、「神は、キリストをすべてのものの上にある頭（かしら）として教会にお与えになりました」（22節）ということです。

これは実に驚くべきことです。「神が、キリストを教会に与えた」と書いてあります。ここに、はっきりとキリストと教会の関係が書いてあります。教会は、神がキリストを頭とし

て、与えてくださったものだということです。教会は、偶然に現れてきたものではありません。それは、キリストを頭として与えられているということです。教会は人間各自が個人的意志によって集まってきて形成された団体でもなければ、信仰者が信仰生活の便宜のために作っている集団でもありません。ここが、教会とこの世のあらゆる団体との本質的に違う点です。キリストが教会の頭であるということは、教会にはキリストの思いが満ちあふれているということです。それだけではありません。「すべてのものの上に」と書いてあります。教会の頭であるキリストは、すべてのものの上にあり、これを支配するということです。

主イエス・キリストは、「主の祈り」の中で、「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」（マタイ六・10）と祈るように教えられました。神のご意思が、天においてはすでに実現されているのです。その神のご意思が、神を信じる人たちの中だけでなく、この世界のあらゆる領域においても実現されるように祈ることをわたしたちは求められているのです。

次にパウロは、「教会はキリストの体である」（23節）といいます。キリストが頭であれば、教会はその体になります。教会が「体」であれば、そこには手もあれば、足も他の肢体もあるということです。指に刺さったトゲ一本のために体全体が痛むように、体全体がいた

わり合うことはいうまでもありません。しかし、そこで一番大切なことは、教会は頭であるキリストとつながっているということです。

わたしたちが、教会を考えるとき、すぐに思い出すのは、「アウグスブルグ信仰告白」です。その第七条には次のように書かれています。「教会は、聖徒の集まりであって、その中で福音が純粋に教えられ、聖礼典が正しく執行される」。ここでも、教会がほんとうに教会であるのは福音、すなわちキリストとの関係を持っているからだというのです。また、教会は聖徒の集まりであるといっています。わたしたちは、教会を通してキリストに出会い、教会の構成員のひとりとされます。その教会員の在り方は、キリストの体として、「キリストとわたし」という個人的な関係ではなく、「キリストの体の一部であるわたし」となるのです。

さて、パウロは、キリストの体である教会は、「すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です」（23節）といいます。教会の中にはキリストが満ちあふれておられます。ここでいう「満たしている方」（プレローマ）とはなにを意味しているのでしょうか。その意味を理解するのに助けになるのはコロサイの信徒への手紙です。その二章9～10節には次のように書かれています。「キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところ

なく、見える形をとって宿っており、あなたがたは、キリストにおいて満たされているのです」。キリストは、神性を具体的に満たしておられる方です。ヨハネ福音書において、「主よ、わたしたちに御父をお示しください」と願うフィリポに対して、主イエスご自身が、「わたしを見た者は、父を見たのだ」と答えておられます（一四・8～9）。また、ヘブライ人への手紙一章3節には、「御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現われ」である、とあります。キリストは、神のすべてを満たしておられる方です。この満たされている状態が「満たしている方」（プレローマ）なのです。すなわち、キリストの体である教会は、キリストが神性を充満させ、しかもキリストがすべてのすべてとなっておられる場なのです。

このように、頭キリストの充満（プレローマ）によって、教会のすべての構成員があらゆる点で満たされていくのがキリストの体である教会の姿です。教会は実に、キリストの支配の中にあり、この世の歴史を歩みながら、キリストによって神の支配にあずかるものです。その意味で、教会は終末の世界に深く根を下ろしているといえるのです。そこに、教会が「勝利の教会」と呼ばれる理由があります。頭であるキリストによって、永遠の勝利を確実に与えられた共同体であるということは、歴史の中にありながら、歴史を越える神の国をそ

の確信の中に与えられていることを示すものとして、まさに「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場」といえるのです。しかし、この勝利は、最後の勝利のとき、すなわち終末のときを待ち望みつつ、信じつつ、この世の歴史の中で戦うものであることを求められています。

ルターは、「主の祈り」の第二の願いについて次のようにいいます。「たしかに神の国は、わたしたちの祈りがなくても、みずからくるものです。しかしわたしたちはこの祈りにおいて、み国がわたしたちのところにもくるように祈るのです」(『小教理問答書』)。このルターの言葉が、すべてを表している、といってよいでしょう。キリストはすべてを満たしておられるのです。しかし、わたしたちは、この世においては弱さや罪が露呈することがあっても、頭であるキリストの充満(プレローマ)によって、キリストがすべてのすべてとなるように、祈ることができるのです。教会は、あらゆる点で、そのメンバーの最後のひとりにいたるまで、余すところなく、キリストの充満によって満たされていくことを祈るのです。ここに、キリストの満ちあふれる教会の姿があります。

宣教二世紀に向かって、日本福音ルーテル教会の成長を祈り求めましょう。キリストの体である教会が成長し、キリストの充満に満たされるならば、世界の主であるキリストの支配

がすべての人に示され、キリストのもとにすべてを集めるという神のみ旨が完成します（一・10）。「御国が来ますように」（マタイ六・10）と、わたしたちが祈るのは、まさにそのことを意味しています。

（重野信之）

一緒に考えましょう

設問一　世界の主であるキリストを頭とする教会は、あらゆる領域に対して責任を負う必要があると考えられますが、宣教二世紀に向けてわたしたちの教会は何ができるか、話し合いましょう。

設問二　キリストの充満（プレローマ）のしるしとして、教会に必要な要素を上げ、その実現のためどのようなことができるか、話し合いましょう。

単元三　神の恵みに生きる教会（二章1～10節）

はじめに　この単元の構成

エフェソ書のこの箇所は、以下の三つの部分に分けることができます。

この区分に基づきながら、五つの視点からテキストを学んでいきましょう。

一　過ちと罪の中に死んでいた人間の「かつての」悲惨な状況について（1～3節）

二　神の恵みによって救われているキリスト者の「今の」状況について（4～7節）

三　神の高価な恵みに対するわたしたちの教会の応答責任について（8～10節）

「神の愛のかたち」に創造された教会

「人」という文字は二人の人間がお互いに支え合って立っている姿を表す表形文字だと言われています。また、「人間」という字は「人の間」とも書きます。「人」という字にしても「人間」という字にしても、共に人間が他者との関わりの中で生きているということを鋭く

洞察しています。

それらが人間同士の「水平次元の関わり」を表明しているのに対し、聖書は人間と神との「垂直次元の関わり」をまず第一に示しています。聖書はその最初に、本来人間は神との関わりの中で生きるように創造されているということを告げています。「神は御自分にかたどって人を創造された」（創世記一・27）。この「神のかたち」（同、口語訳）とは何を意味するのか。「神は愛（アガペー）」（一ヨハネ四・8）というみ言葉から考えるならば、人間もまた「神の愛のかたち」に創造されているということです。それは具体的には、個々の人間が「神」と「自己」と「隣人」と愛の関係の中に生きるように創造されているということです。人間は創造主なる神によって最初から「関係的存在」（M・ブーバー）として造られています。もっとも、人間はすぐさま神に背反していったのですが……。

ここで言う「愛」とは、わたしたちの中にある「感情」や「意志」のことではなく、わたしとあなたの間の「関係」自体を指しています。たとえてみれば、それはちょうど「空気」のようなものです。それはまず、神からの恵みとしてわたしたちに無代価で与えられています。次に、大気中に「わたし」が存在しているように、「わたし」という人間の中に愛があるのではなくて、愛の中に「わたし」という人間が存在しています。そして、「わたしたち」

の間にわたしたちを包むようにして空気が存在しているのと同様に、愛もまた「わたしとあなた」の間に存在しています。さらには、空気、もっと正確に言えばその中の酸素のことですが、それがなければ人間は窒息してしまうのと同様、愛がなければわたしたちは本当の人生を生きていけません。それは聖書が言うように、わたしたちが最初から愛を呼吸して生きていくようにと神によって造られているからです。「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創世記二・7）。神の「命の息」すなわち「愛の聖霊」が、わたしたちに吹き入れられる時に人は初めて生きた者となることができます。空気が動くと「風」になりますが、「神の愛」の動きこそわたしたちに命を与える「神の息吹き」です。自分が誰かに愛されている、大切にされていると感じる時、わたしたちは深い生の喜びを感じます。その典型的な例は赤ちゃんです。赤ちゃんは親の愛を全身で受け止めて、やはり全身で喜びを表わし応答していきます。赤ちゃんにとって親の愛とは一方的な無償の恵みです。この愛を呼吸して、愛の中で赤ちゃんは成長していくのです。

そのように人間は初めから愛に生きるようにと関係的存在として造られています。人間はまず第一に、神を愛するように、神との正しい関係の中に生きるようと造られました。「心

を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」（ルカ一〇・27）とある通りです。そして第二に、人間は自己を愛するようにと造られ、第三に、他者を愛するようにと造られています。「隣人を自分のように愛しなさい」（同一〇・27）という戒めはそのことを表しています。そして不思議なことに、これら神と自己と隣人という三方向に向かう愛は、ちょうど三位一体の神のように、区別することはできても分離することはできないように思われます。

このように神の愛を呼吸しつつ神と自己と隣人との愛の関係に生きること、これが創造主なる神が定めてくださったわたしたちの人生の目標であり、的であります。そして人間の「罪（ハマルティア、ギリシャ語で「的はずれ」の意）」とは、この神の設定された「的をはずすこと」です。

「教会」は主イエス・キリストが与えてくださった新しい愛の掟に生きる者の群れです。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ一三・34、なお同一五・12をも参照）。神はわたしたち「教会」を通してご自身の愛がこの世に啓示されることを望んでおられます。神のまなざしの中で教会は「地の塩、世の光」（マタイ五・13～14）であり、「地の塩、

世の光」として教会は神の愛の光を人々の前に輝かせます。その意味では、教会こそ「神のかたち」に造られていると言えましょう。教会は「神のかたちであるキリスト」（フィリピ二・6、口語訳）の生きた「からだ」（エフェソ一・23）です。

わたしたちの原点～「かつての過ちと罪」の想起と「悔い改め」

エフェソ二章1～3節では、「かつての」、キリストを信じる以前に罪の中に死んでいた人間の悲惨な状況が語られていますが、4～7節では、神の圧倒的な恵みによって「今や」救われているキリスト者の状況が語られています。人間の根源的な「罪」とは、創世記にあるように、創造主なる神への反逆であり、神との正しい関係を破棄することでした。またそれは、神の命の息を拒絶することであったとも言えましょう。神の愛を呼吸することを自ら停止したのです。そのように「罪」とは「神との関係を破ること」ですが、逆に「救い」とは神の恵みによって「罪を赦され、再び神との正しい関係の中に招き入れられること」です。

パウロはなぜ急にここで、それまでとはぐっと調子を変えて、エフェソの信徒たちに「かつての過ちと罪」とを想起させているのでしょうか。それはこの手紙が書かれた背景に、恐らく彼らがキリストを信じる以前の自分たちの「罪」を忘れてしまっていたという状況があ

ったと思われます。

人は容易に過去を忘却してしまいます。日本人は特にその傾向が強いのかもしれません。自分に都合の悪いことはすべて水に流して忘れてしまう。忘れてしまおうとする。たとえば今世紀前半に日本が犯したアジア侵略の罪があります。その侵略において殺されたアジアの人々は二千万人とも言われています。それほど多くのアジアの人々が、わたしたち日本人の手で、日本の「天皇の軍隊」によって殺されていったのです。アジアの人々は今もなお、そのことをはっきりと覚えています。それはちょうど、「この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊に従い、過ちと罪を犯して歩んでいた」（2節）と語られているかつての状況と同じであったのではなかったでしょうか。

わたしたちの教会は一九九三年に宣教百年を迎えます。その百年の歩みの前半部分―一八九三年の宣教開始から一九四五年の太平洋戦争敗戦に至るまでの五十二年間ですが―それは天皇と軍部と政府とが富国強兵を強力に推し進め、アジアへの侵略と戦争を遂行していった時代と正確に重なります。一八九四年「日清戦争」開始、一九〇四年「日露戦争」開始、一九一〇年「朝鮮併合」という一連の流れの中で、一九一九年には朝鮮全土において展開された非暴力の「三・一独立運動（万歳運動）」が日本の官憲によって徹底的に弾圧されるとい

う出来事も起こります。そして、一九三一年「満州事変」、一九三七年「日中戦争」開始、一九四一年「太平洋戦争」開始、と続きます。その結果が、一九四五年八月六日の広島、九日の長崎への原爆投下を経て、一五日の連合軍への無条件降伏となっていったのです。日本がもたらしたそのような苦しみと悲しみと狂気の時代に、わたしたちの教会はどこにいて、どのような対応をしていたのでしょうか。アジアの脈絡において検証されるべき点です。

「過去に対して目を閉ざす者は、現在に対しても目を閉ざす」（R・v・ヴァイツゼッカー『荒野の四十年』岩波ブックレット）と言われている通りに、わたしたちはキリスト者として自分の、そして自分たちの「かつての過ちと罪」とを決して忘れてはなりません。過去が忘れられてしまうと現在も曖昧となってしまう。過去の罪が曖昧にされてしまうと現在の救いも曖昧になり、さらには過去と現在の間に立つキリストの十字架の贖罪の意味が曖昧になってしまいます。「かつての過ちと罪」を、「生まれながらの神の怒りの子」（3節、口語訳）であったことを思い起こし、日々新たに悔い改め、それを告白し続けていくことこそ、キリスト者として、また、キリスト教会としてのわたしたちの大切な原点であり、日々の出発点です。かつての自己の罪深さに泣く者だけが、十字架に表わされた神の恵みの高価さに涙することができるのではないでしょうか。「わたしたちの主であり師であるイエス・キリ

ストが、『悔い改めよ……』（マタイ四・17）と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである」（ルター『九十五箇条の提題』第一項）。宗教改革が「悔い改め」を叫ぶところから始まっていったということを覚えたいと思います。宗教改革の教会は常に「悔い改め（メタノイア）」から出発するのです。

わたしたちの原点〜「洗礼」の恵みの想起と「悔い改め」

パウロはしかし、そのような過ちと罪とにもかかわらず、わたしたちを見捨てずどこまでも愛し続けてくださる神の憐れみの豊かさを語ります。「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」（4〜6節）。罪にまみれていたわたしたちが今や天の王座に着いている!? これは驚くべき発言です。実は、この4節から8節前半には、初代教会における洗礼時の信仰告白が挿入されていると考えられていますから、ここは「洗礼」との関連で読んでいくべき箇所でありましょう。

ここでは「共に」という言葉が三度反復されています。キリストと共に生き、共に復活

し、共に天の王座に着く、それが洗礼を受けてキリスト者とされたわたしたちの姿なのだとパウロは言うのです。洗礼とは、「わたしたちのうちにある古いアダムが、日ごとの悔いと、ざんげとによって、すべての罪と悪い欲とともにおぼれ死に、かえって、日ごとに新しい人が現れ、よみがえり、神のまえに、義と純潔とをもって永遠に生きるということ」（ルター『小教理問答書』）です。

この「洗礼」の出来事をパウロはここでエフェソの信徒たちに想起させるのです。「あなたがたはもはやキリストから離れて生きているのではなく、洗礼において既にキリストに結びつけられており、今やキリストと共に生かされているのだ」と。わたしたちのキリスト者としての原点は、「かつての罪」を思い起こすと同時に、それにもかかわらずわたしたちが既に「洗礼」によって罪を赦され新しい命に生かされているという恵みの事実を思い起こすことです。このキリストの恵みの前でこそ、真の意味でのわたしたちの罪の「悔い改め（メタノイア、ギリシャ語で「方向転換」の意）」が起こっていきます。

神の高価な恵みに生きる教会

わたしたちは神の恵みによって今や救われています。神がなぜこのようなわたしたちを見捨てずに、「この上なく」（4節）愛し続けて下さるのかは本当に不思議であり、神秘です。ただわたしたちに分ることは、その神の恵みが、わたしたちの思いを遙かに越えて、その独り子を賜るほどこの上なく高価なものであるということです。

そして神はそのような恵みをわたしたち教会を通して「来るべき世」（7節）に現わそうとされています。ここに教会の存在意味があります。教会を通して神はご自身の愛をこの世に現わそうと意図しておられるのです。この神のみ心に従って、その委託を受けて、わたしたち教会は御子なる神イエス・キリストの十字架の福音という神の高価な恵みをこの世に宣教していくのです。

5節に、それは8節でも繰り返されますが、「あなたがたの救われたのは恵みによるのです」とあります。かつて罪の中に死んでいたはずのわたしたちが今生かされているのは、百パーセント神の恵みによります。わたしたちの側に何か救いに値するような努力や功績があったためではありません。徹頭徹尾、救いは神からの一方的な恵みによるということをパウロは語ります。「このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるので

はありません。それは、だれも誇ることがないためです」（8～9節）。わたしたちはともすれば行いを誇ろうとします。しかし、創造主なる神の前でわたしたちには誇るべき行いなどないのです。わたしたちが今生かされていることも、わたしたちの信仰も、すべては神の賜物であり、神の恵みなのです。

わたしたち宗教改革の教会はこの「恵みのみ」という点を明確にしました。救いには神の恵みの他に人間の行いが必要であるというわけではありません。百パーセント神の恵みによって信仰を通してわたしたちは救われている。パウロは自分のことを「罪人のかしらである」（一テモテ一・15、口語訳）と呼んでいますが、この発言もまたそのような福音理解から来ています。自分の中には神の救いに値する何ものも存在しないばかりか、むしろ、神の裁きに値する罪しかないのです。小さな子供が親に甘えるように、「いい子にしていたから、わたしにご褒美をちょうだい」と救いを神にねだることはできません。本来ならば救われるはずのない「わたし」という人間が、神の恵みによって救われているのです。思いもよらぬ時に、思いもよらぬ仕方で、思いもよらぬ高価なビックリプレゼントを、わたしたちは神から一方的に、そして無代価でいただいています。「高価」と言ったのは、繰り返しになりますが、それが神の子の血潮という高い代価を払ってわたしたちに贈り与えられたものだから

です。

わたしたちを救ってくださった神は、「その独り子をお与えになったほど世を愛された」（ヨハネ三・16）神です。この驚くべき神の恵みを、わたしたちは主イエス・キリストを信じる信仰を通していただくことが許されたのです。わたしたちの教会は、このような神の高価な恵みによって生かされている教会であり、その恵みの高価さをこの世に高らかに宣言する教会であります。

律法の第三用法～キリストへの服従

「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである」（10節、口語訳）とパウロは言います。わたしたち教会は「神の作品」です。それがどんなに小さな群れであったとしても、わたしたちは神の愛のかたちに造られた作品なのです。この作品に込められた命は神の愛であり、この作品が造られた意図は神が前もって準備してくださった「善い業を行う」ということです。教会はキリストにおいて造られた神の新しい被造物です。

わたしたちがキリスト者とされたということ、わたしたちの教会がこの世に立てられてい

るということには、神のご計画の中にあって大切な使命が与えられています。それはこの世に対して神の福音を宣教することであると学びました（7節）。しかし、「宣教する」ことと「善い業（＝奉仕）を行う」こととは切り離しえないものです。伝道と奉仕とは主イエス・キリストのご生涯においても一つだったのです。わたしたち教会もこの世にあって、み言葉を伝えることの中で他者に仕え、他者に仕えることの中でみ言葉を伝えていきます。

ここで「信仰」と「行い（＝業）」の関係について確認しておきます。わたしたちはただ「恵み」によって「信仰」を通して救われたのであって、自らの「行い（律法を守る行為）」を通して救われたのではありません。それはゆるがせにできない点です。しかし、救われた者として当然、その後の生き方が大切となります。わたしたちはキリストによって救われた者として喜んで「善い業を行って歩む」（10節）のです。この「善い業」とは、救いを得るための「善行」ではなく、救われた喜びからわたしたちがそこへと自然に押し出されていく「愛の業」のことであります。それはキリストにまねぶ業であり、キリストに服従するということであり、具体的には律法を守るということにおいて現れていきます。

ここで大切なことは「律法の第三用法」と呼ばれる事柄です。「第一用法」は「市民的（政治的）用法」とも呼ばれますが、律法によって罪が外面的に抑制されるということを表

わします。「第二用法」は「神学的用法」とも呼ばれますが、律法によって人が罪の認識に導かれるということを指します。それに対して「第三用法」とは、救われた者としての生きるべき服従の規範が律法に示されているということであり、それは「教育的用法」とも呼ばれてきました。主の山上の説教（マタイ五～七章）もまた第二用法的だけではなく、第三用法的にも理解されるべきものでありましょう。そこでは「キリストへの服従」が問題とされています。

前述のようにヨハネ福音書は、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という主の「新しい掟」を伝えていますが、ここに「律法の第三用法」が内容的に集約されているように思います。神の高価な恵みに生かされているわたしたち教会は、キリストの新しい律法に服従する教会でもあります。「信ずる者だけが服従し、服従する者だけが信ずる」（ボンヘッファー）のです。

恵みによって罪を赦され、再びキリストにおいて神の愛のかたちに造られたわたしたちの教会は、この世の中にあって、神の愛を呼吸し、キリストに服従し、キリストのからだとしてキリストと共に「善き愛の業」を行って歩むのです。「キリストがわたしたちのためになりたもうたように、わたしたちもまたわたしの隣人のために一人のキリストとなろう」（ル

ター『キリスト者の自由』)。

（大柴譲治）

一緒に考えましょう

設問一　今、宣教百年を迎えようとしているわたしたち日本福音ルーテル教会がこの百年の歩みを省みる時、わたしたちが犯してきた「かつての過ちと罪」とは何でしょうか。

設問二　「神の高価な恵み」について黙想しましょう。

設問三　「律法の第三用法」について、愛のないところに愛を作り出すということがどのようにしてわたしたちに可能であるのか、具体例を通して考えてみましょう。

「まだここは地獄じゃない。地獄とは……ヘンリック、愛がまったくなくなってしまった場所だよ。しかしここには愛がまだなくなっていない。」

（遠藤周作『女の一生・第二部』より。アウシュビッツにおけるコルベ神父の言葉）

単元四　キリストの平和を実現する教会（二章11～22節）

はじめに　この単元の構成

エフェソ書のこの箇所は次の三つの部分に分けることができます。そしてそれらは二章1～10節に対応しています。ここでは特に第二の部分を中心にしてご一緒に考えていきたいと思います。

一　キリストと出会う「以前」の異邦人の希望なく、神なき状況について（11～13節）
二　キリストはわたしたちの平和～十字架による敵意という隔ての壁の除去（14～18節）
三　あなたがた教会は「今や」神の家族であり、聖なる神殿である（19～22節）

キリストの十字架の血潮によって

二章の初めと同様にパウロはここでも、「あなたがたがキリストと出会う以前に置かれていた状況を思い起しなさい」と語ることから始めています。エフェソの信徒たちはかつては

「自分の過ちと罪のゆえに死んでいた状態」（二・1）にあった。そして彼らは、ユダヤ人から「異邦人（異教徒）」「割礼のない者」（二・11）、つまり「救いの外に置かれた者」と呼ばれていた。そのような「以前の状態」を想起するようパウロは語るのです。それはキリストと出会った後の「今」の状態とはまったく正反対のものでした。以前はキリストと関わりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていた者。それが今や、キリストの十字架の血潮によって、キリストご自身と深い関わりを持つ者に変えられている。キリストのゆえにあなたがたは今や、神のイスラエルの民に属し、キリストにおいて救いの約束を含む神との新しい契約を結び、この世の中で決して揺るぐことのない希望を与えられて、神の愛を深く知る生き方をするようになっているのだとパウロは語ろうとしているのです。「以前」と「今や」とを分ける転換点にはキリストの十字架が立っています。

キリストの十字架、それはわたしたちの実存を根底から新しく造り変えるほどに大きな力をもった事柄です。それを「究極的な事柄」と語った人もいます。十字架は神の高価な恵みが最も明確に示されている場所です。わたしたちの罪と死とは御子の血潮によって終止符を打たれている。以前は神から遠く離れていた者が、キリストの血によって今や神に近い者と

されている。十字架において「神との関係」が回復されているのです。そして同時に、以前は互いに疎遠で心が通い合わず、孤立し、バラバラであった者たちが、今やキリストの血によって「敵意という隔ての中垣」（14節、口語訳）を除去され、近くに集められ、心を通い合わせ、連帯し、キリストのもとに一つに結び合わされている。ここでは十字架において「隣人との関係」も回復されているのです。

これらのパウロの言葉の背後には旧約の預言者イザヤの言葉が響いています。「また、主のもとに集まってきた異邦人が主に仕え、主の名を愛し、その僕となり、安息日を守り、それを汚すことなくわたしの契約を固く守るなら、わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き、わたしの祈りの家の喜びの祝いに連なることを許す」（イザヤ五六・6～7）。「平和、平和、遠くにいる者にも近くにいる者にも。わたしは彼をいやす、と主は言われる」（五七・19）。

今や、キリストにおいてこれらの預言が成就しています。「神から遠く離れていた異邦人」と「神の近くにいたユダヤ人」との間にあった敵意をキリストが癒し、彼らを一つに結び合わせているのです。このことはわたしたちに聖餐式を想起させます。イザヤの言葉で言えば、聖餐式こそ「神の祈りの家の喜びの祝い」であり、ユダヤ人も異邦人もすべてキリストを信じる者がそこへと招かれている終末的な祝宴の前祝いなのです。

新しい時代の到来～終末の先取り

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」（14～16節）。

この部分には、ちょうど二・4～8節と同様、初代教会において洗礼の際に告白された信仰告白が挿入されていると考えられています。互いに憎み合っていたユダヤ人と異邦人との敵意という隔ての中垣がキリストの十字架によって滅ぼされ、二つのものがキリストにあって一つにされた。パウロはわたしたちの視線を常にキリストの十字架に向けさせ、その一点に集中させています。そのためにこの信仰告白がここに挿入されているのです。これが洗礼時の信仰告白であったということは、「キリストこそわたしたちの平和」と信じ告白することこそキリスト者の生の原点であり、出発点であったということを意味しています。

この「隔ての壁」とは具体的にはユダヤ人と異邦人とを隔てていた「規則と戒律づくめの

律法」のことを指していると思われますが、パウロはもしかするとこの時ここで、エルサレム神殿の本殿・中庭と異邦人の庭とを隔てるために築かれていた高さ一メートル半ほどの石の壁を頭に思い描いていたのかもしれません。当時この境界を侵害した異邦人には死刑が科せられました。そのタブーを破ってパウロが神殿内に異邦人を連れ込んだと誤解されて大騒動が起こったという事件も伝えられています（使徒言行録二一・27以下）。当時は「規則と戒律づくめの律法」が守られており、ユダヤ人と異邦人とは社会的にも信仰的にも互いの間に置かれた壁を突破することのできない時代でした。しかしキリストの平和の福音によってこの隔ての中垣は、あのベルリンの壁と同じように撤去され、今やまったく新しい時代が到来しました。キリストによって真の平和が告知され、この地上に平和が実現したのです。その完成は終末まで待たねばならないにしても、これは終末の先取りです。神の国は既にこの地上に始まっているのです。

「キリストの平和（シャローム）」～現代世界における教会の課題

「キリストはわたしたちの平和」という告白の意味の重さを考える必要があります。そこにこそ教会が取り組むべき現代的な課題があるからです。この「平和」とは「平安」とも訳

される言葉ですが、ヘブル語では「シャローム」、ギリシャ語では「エイレーネー」です。「シャローム」は人と出会った時や別れる時の祝福の挨拶の言葉でした。それはまた福音書によれば、主が十字架にかかる前や復活の後に弟子たちに繰り返し語られた言葉でもあったのです。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」（ヨハネ一四・27）。「あなたがたに平和があるように」（ルカ二四・36、ヨハネ二〇・19、21、26）。主は弟子たちにご自身の平和を残していかれました。また山上の説教の冒頭でも、キリストの平和をこの世において実現する者への招きと祝福の言葉が語られています。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ五・9）。ここで「平和を実現する人々」が「義（正義）のために迫害される人々」と並べて語られている点に注意しておきたいと思います。

ここで言われている「平和」とは、もちろん単に「争いがない状態」を指しているのではありません。そうではなくて、もっと積極的に、精神的・肉体的・物質的・霊的に何一つ欠けたり損なわれたりしたところのない全き充足状態を表わします。この「平和」の源であり与え主であるお方は神ご自身であり（ローマ一五・33）、その意味でそれは神の賜物です。神はイスラエルの民と永遠の平和の契約を結び（エゼキエル三四・26他）、その終末時の完

成を約束されています（イザヤ一一・1～10、ヨハネ黙示録二一章他）。神はわたしたちに「キリストの平和」を与えてわたしたちと永遠の平和の契約を結び、終わりの日の完成を約束してくださっているのです。

山上の説教で「平和」と「正義」が並べられていたように、旧約聖書においても神の「平和」と神の「正義」とは切り離すことができません。「正義が造り出すものは平和であり、正義が生み出すものはとこしえに安らかな信頼である」（イザヤ三二・17）。

「正義がなければいかなる平和もない、平和がなければいかなる正義もない」（C・F・v・ヴァイツゼッカー『時は迫れり』法政大学出版局）。これは現代社会において神の平和の実現を目指す世界の諸教会のエキュメニカルな動きの中で語られた言葉です。世界教会協議会（WCC）はローマ・カトリック教会と共同で一九九〇年三月に韓国・ソウルで「正義・平和・被造物（創造）の保全」（JPIC）会議を開き、現代世界においてキリスト教会が取り組むべき課題について具体的に討議しました。それに先立つこと約二か月、ブラジルのクルチバで開かれた世界ルーテル連盟（LWF）総会の主題は「わが民の叫びを聞けり」というものでした。そこでも現代世界の中で発せられている多くの「苦しみの叫び」が教会の取り組むべき課題として具体的に取り上げられています。わたしたち日本福音ルーテ

ル教会が宣教二世紀の課題として取り組まなければならない課題の多くも、このようなエキュメニカルな動きの中で明確になってきているように思われます。

「神の蝕」～この世の現実の中で

ここで目を転じてわたしたちの身近な現実を見てみましょう。わたしたちの周囲には実に多くの壁が存在しており、また少数者や「弱者」に対するいわれなき差別が存在しています。わたしたちの内外を貫いて不正義が厳然と存在しているのです。わたしたち自身にもこのような壁を構築し、温存させているという側面があるように思えます。耳を澄ませてみましょう。わたしたちのまわりにいる多くの「小さき者」たちの苦しみの叫びが聞こえてくるでしょうか。子供、女性、老人、病人、「障害者」、「肉体労働者」、「貧しい者」、「被差別民」、少数民族（アイヌなど）、在日外国人（在日韓国朝鮮人など）、外国人労働者などなど、わたしたちの周囲には無数の差別の現実があります。少し目を遠くに離すと、「階級」と「階級」、民族と民族、人種と人種、宗教と宗教とを隔てる壁や、東西を隔てるイデオロギー・社会体制の壁、南北を隔てる社会経済構造の壁など、世界中に様々な次元にわたって壁が存在していることが見えてきます。そのような無数の壁に隔てられて、わたしたちは分断

され、孤立しています。このような壁の多さと人間の孤立とは、わたしたち自身の罪の深さに由来するものです。

しかし、この世における他者と自己を隔てる無数の壁の根もとには一つの根本的な壁が存在しています。それは人間が構築した「神とわたしたちとを隔てる壁」です。人間は最初から創造主なる神に反逆して生きようと欲しました。創造主なる神を捨てて自らの被造物性を否定し、人間は自分だけで生きようとしてきたのです。そして神との間に大きな壁を築きました。その意味で「バベルの塔の物語」（創世記一一章）は人間が神との間に壁を作る物語として象徴的です。ちょうど月が太陽と地球の間に入って一直線に並ぶと日蝕が起るように、人間の罪が作る分厚い壁に隠れて神の姿は見えなくなり、「神の蝕」（M・ブーバー）が起りました。そして闇がこの世界を覆ったのです。

しかし、神に遣わされた御子イエス・キリストがこの地上に降り立ち、十字架においてこの罪の壁に穴をあけ、闇の中に光を回復してくださいました。御子キリストの十字架の血潮はこの人間の築いた罪の壁をうがつための高価な代価として支払われました。神は御子を送ることによって「わが民の叫び」をお聞きくださったのです。キリストの血潮によってわたしたちは罪を赦され、神と和解をすることが許されました。壁によって苦しみや悲しみを強

いられている者に十字架において神の正義と平和とが実現したのです。このわたしたちの罪のために血を流してくださったキリスト、神の蝕を過ぎ去らせてくださったキリストこそ、わたしたちの平和です。そのキリストの平和によって、個々人や民族、国家、イデオロギー、宗教の間にある「敵意という隔ての中垣」が既に突破されているとわたしたちは告白しているのです。

平和を実現してゆく「キリストの手」としての教会

パウロはこのエフェソの信徒への手紙の一章で既に、「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場」（23節）であると語っています。この二章の終わりではさらに、教会は「神の家族」（19節）であり、キリスト・イエスご自身をかなめ石とする「聖なる神殿」（21節）となり、聖霊の働きによって「神のすまい」（22節）となるのだとパウロは語ります。その意味で教会はこの世の中に建てられた神の現実なのです。

「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」（黙示録二一・4）と約束されている新しい天と新しい地の到来をわたしたちは確かに終わりの日まで待たなければならない

にしても、かの日には必ず神の正義と平和とが完全な形で実現するのです。しかしわたしたち教会は、キリストの十字架によって終末の平和が既に現在この世にもたらされているということを知っています。依然として圧倒的なしぶとさでわたしたちの周囲に存在し、多くの苦しみや悲しみをもたらしている様々な差別や抑圧、不和や戦争という人間の罪の現実の中で、わたしたち教会はキリストの体として、この世から敵意という隔ての中垣を取り除いて「神の平和」を実現していこうとされているキリストご自身の業に参与していくのです。キリストはその体であるわたしたち教会を通して今も平和の福音を全世界に告知し、ご自身の平和を実現していこうとされています。教会としてキリストは実存し、今もこの世に現臨されています。

ルーテル神大の校舎の二階の、玄関を入って階段を上がった所に、両腕を持たないキリスト像があります。このキリスト像がどこから由来しているのかは不明のようですが、その創作者の意図はわたしたち自身がキリストの腕であるというところにあるように思われます。わたしたち教会こそが、キリストの平和をこの世にあって終末に向かって実現していくキリストの腕であり、手なのです。キリストこそわたしたちの平和です。この平和の福音こそ、わたしたちキリスト者の生の原点であり、教会の活動の原点です。この平和の福音に堅く立

ち、この平和の福音を高らかにこの世に宣言して神の教会であるわたしたちは生きるのです。

（大柴譲治）

一緒に考えましょう

設問一　キリストの十字架の血潮について黙想し、それを分かち合いましょう。

設問二　現代世界と日本社会において、キリストの体であるわたしたち教会が取り組んでいる課題、ならびに取り組むべき課題について「隔ての壁」の例をあげて論じましょう。

設問三　「平和」と「正義」について、またその両者の関連について黙想し、それを分かち合いましょう。

単元五　伝道する教会（三章1～13節）

はじめに　この単元の構成

一　キリストの囚人　（1節）

二　使徒の務め、伝道とは何か　（2～13節）

キリストの囚人　（三・1）

パウロは今、捕われの身です。

パウロは、この手紙を恐らくローマの獄中から書いたものと思われます。

パウロの使命は、異邦人にキリストの福音を伝えることでした。彼は、あのダマスコ途上でキリストに捕らえられ（使徒言行録九・1以下）、そして異邦人伝道へとキリストによって召されてゆくのですが（同九・15）、またパウロの使命がそこにあることがここでも三章1節の言葉を読むとわかるのです。「こういうわけであなたがた異邦人のために、キリス

ト・イエスの囚人となっているわたしパウロは…」という彼の言葉です。

このパウロの言葉を読んで、わたしたちが心を捉えられるのは、「キリスト・イエスの囚人パウロは」という言葉ではないでしょうか。考えてみれば、これは本当に不思議な言葉です。しかしこれは、彼が今獄中にあるから、悲壮な感慨に身を置いて、自分をこう呼んでいるのではないと思うのです。

ではなぜパウロは自分を囚人などと呼ぶのでしょうか。なぜ彼は自分をキリストの囚人などと自己規定するのでしょうか。今、パウロは手紙を書いているのです。手紙は、ふつう相手に伝えたいことがあるとき、自分の語ることを相手にわかってほしいときに書くものです。それなのに自分を理解してほしいときに、誰がいったい自分を囚人などと呼ぶでしょうか。しかもパウロは、不思議なことにむしろ喜んで使っているように見えるのです。なぜなのでしょうか。

それはきっとパウロにとって、自分がキリストの囚人であるというのは、自分のすべてを語り尽くしている、そういう言葉であったに違いないからだと思うのです。パウロは、自分がキリストの囚人であるということの中に、本当の救いと自由があることを知っていたのです。そして、自分をそのように呼ぶことで、彼はキリストによって与えられた自分の使命

を、強く自覚していたに違いないのです。そして彼に与えられているその使命が、ただ主の恵みによるということ、主の恵み以外の何ものでもないことを深く自覚していたのです（ガラテヤ二・9、ローマ一五・15）。たとえ今、彼は獄中に在るとしてもです。

聖書を見ると、「わたしパウロは」は14節の「祈ります」へ続くのが自然です。しかし、パウロは、「あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となったわたし」という自分の言葉に、その恵みの事情を語らずにおられなくなったのだと思うのです。だからパウロは、「…わたしパウロは…」と言った後、これまでの文脈を一時断って、事の次第を語り始めるのです。従って、エフェソの人々にパウロがこれから語ろうとする恵みの事の次第を聞き、そこで明らかにされるであろう事柄を聞くことが、わたしたちの今回の学びの課題となるのです。

では、早速ご一緒に聖書を読むことに致しましょう。

使徒の務め、伝道とは何か　（三・2〜13）

「あなたがたのために神がわたしに恵みをお与えになった次第について、あなたがたは聞いたにちがいありません。初めに手短に書いたように、秘められた計画が啓示によってわた

しに知らされました。あなたがたは、それを読めば、キリストによって実現されるこの計画を、わたしがどのように理解しているかが分かると思います」（2～4節）。

このパウロの言葉を読んで、エフェソ書を通読してきたわたしたちが気づくのは、「わたしにお与えになった」「わたしに知らされた」「わたしがどのように理解しているか」というように、パウロが事柄を、わたし自身のこととして語っていることです。わたしたちは、この手紙の調子が、ここに来て個人的な調子に変わったことに、先の1節を含めて気がつくのです。確かにパウロは、これまで事柄を、言わば非個人的に、客観的に語っていました。しかし、ここに来てその調子は変わりました。それは、パウロが、異邦人伝道を使命として与えられ、しかも恵みとして、それを深く自覚していたのですから、神の恵みの次第を語るときに、「わたし」と切り離して語り得ないことは当然だと思います。しかし、わたしたちがそのパウロの言葉を聞くときに注意しなくてはならないのは、彼が語る恵みの次第を、パウロという宗教的天才の個人的、心理的特異性に由来するものとして終らせてはならないということです。もちろん、パウロがわたしたちとは比ぶべくもないことは明らかなのですが、大切なことは彼の語る言葉を、また語られる事柄を聞くとき、わたしたちはそれを教会的に聴きとらねばならないということです。つまり、パウロが「わたしに」と語るとき、その背

後に、歴史的事実としての教会があるということを忘れてはならないのです。

そのことに心を留めて、ではパウロはここで何を語っているのでしょうか。

パウロは「秘められた計画が啓示によってわたしに知らされた」と語ります。ではパウロに知らされた計画とはどのようなことなのでしょうか。彼は、すでにそのことについて書いており、彼がそのことをどう理解しているかを書いていると言います。それは前回の二章11節以下で語られていることだと思います。そこでは、キリストはわたしたちの平和であって、ユダヤ人と異邦人の間の中垣を、十字架によって和解させ、一つの御霊によって、一つの教会において、二つを一つにされるということ、そしてそれは、前もってキリストにおいてお決めになった神のみ心によるものだと語られています。これが、パウロがここで言う「キリストによって実現されるこの計画」であり、そしてそのことが、実はパウロ自身の全生涯をかけた使徒としての自覚の基であることを語るのです。

そしてもしここにパウロの使命の自覚があるとするなら、わたしたちもここで使徒の務め、伝道ということを考えてみなくてはならないでしょう。しかもわたしたちは、日本というキリスト者が少数である社会に生きる者として、しっかりと日本という場所に足をつけて、したがってアジアの日本の教会ということをしっかりと踏まえて、このことを考えてみ

なくてはならないのではないでしょうか。

ではそもそも伝道とは何なのでしょうか。キリスト教徒以外の人々をキリスト教徒にさせることなのでしょうか。この頃、わたしたちは〝伝道の不振〟という言葉をよく耳にし、また口にします。しかしその場合、伝道の不振ということが、キリスト者を獲得すること、受洗者を獲得することがなかなかうまくいかない、という脈絡で言われていることがありはしないでしょうか。しかし、教会の伝道とは本当にそういうことなのでしょうか。そうでないことは、パウロの語るのを聞けば明らかだと思います。では教会の伝道とは、どういうことなのでしょうか。

パウロはここで、キリストの十字架を見据えていることがわかります。彼は自分を異邦人伝道へと召し給うキリストの十字架を、和解の福音の歴史的根拠として捉え、語っているのです。

伝道とは「道を伝える」と書きます。道とはキリストが示された道です。キリストご自身です（ヨハネ一四・6）。神と人を結ぶ道、人と人を結ぶ道です。そして、この道こそ十字架による和解の福音なのです。キリスト者は、この世に向かってこの道を示し、同時に自らこの道を歩む者なのです。このことは、伝道というものが、わたしたちの生き方に関わって

なされるものであることを示しているのではないでしょうか。では、生き方に関わってなされるとはどういうことなのでしょうか。パウロは、そのことを今、「計画」という言葉を鍵にして語ろうとしているのです。

「この計画は、キリスト以前の時代には人の子らには知らされていませんでしたが、今や〝霊〟によって、キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました」（5節）と語って、キリストこそその計画が明らかにされる唯一の機会であることを示し、さらに、その神のご計画とは、「すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです」（6節）と語るのです。このことは、二章の1～10節ですでに彼が語った通り、罪に死んでいたわたしたちを、神がキリストと共に生かしてくださるということであり、ユダヤ人も異邦人も、同じ恵みにあずかり、一つの教会に生かされることです。それが神のご計画の目的なのだとパウロは語るのです。

したがってわたしたちも、伝道ということを、このキリストを頭とする体なる教会の伝道として捉えることが必要となるのです。対立の構造の下での生の現実の中で、苦難を負って生きている人々に、このキリストの和解の福音を伝えなければならないのです。このキリス

トの和解の福音にあずかる場こそ、教会であるという確信のもとに、パウロがそうであったように、わたしたちに与えられた使命を果たしていかねばならないのです。なぜなら、このキリストこそ、わたしたちを他者と共に生きることへと招き給う、神の言葉そのものであるからです。したがって、伝道はこの和解の福音に基礎づけられて、わたしたちが他者と共に生きることから始まるのです。

思えば、主は、あの十字架において明らかにされた人間の絶望的状況を、人間と共に生き、死なれました。しかし、その絶望的状況の中に、それを越えて、それを新しくすることのできる神の力を復活によって明らかにされたのです。ですから問題は、いかにしてわたしたちも隣人と共に生きる生活の中で、自分自身を含めた共同の生活の絶望的状況と、それを変えてくださる神の力の現実とを自覚的に共有することができるかということだと思います。共に生きるとは、生の場で、互いに抱える問題、またそこに表われている人間の絶望的状態を、しっかりと自分も負い、それに向かい取り組むことに他なりません。このことを主は「自分の十字架を負う」という表現で語られたのです。それは、キリストが十字架上で負われた人間の現実を、わたしたちも直視し、これをかみしめ、祈りながらこれと取り組むということです。それは、隣人の苦悩を負い、その中でキリストを死から復活させた神の力に

信頼し、希望を持ち続け、他者と共に生きることなのです。そこからわたしたちの伝道は始まるのです。

このように見てくるなら、伝道をキリスト者獲得・受洗者獲得というように狭く考えてしまってはいけないと思います。わたしたちが、しかも一人一人が生きている場で、またそれぞれの教会がおかれている地域、固有の状況の中で、キリストの和解の福音が人々に届いているかどうかを、わたしたちは省みなくてはならないのです。したがって、ここでは同時に「数は問題ではない」と安易に考えることも退けられることになります。なぜなら、世に福音を待っている人は数知れずいるのにそこにキリストの福音が届いていないとしたら、それは福音の宣教をキリストから委ねられたわたしたちがその責任を果していないということになるからです。「折が良くても悪くても」「み言葉を宣べ伝える」（二テモテ四・2）ことはわたしたちの使命なのです。

さて、パウロは語ります。「神は、その力を働かせてわたしに恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました」（7～8節a）。この使命に対するパウロの姿には、何のてらいも、力みもありません。彼はただ自分は神に用いられる者であり、したがって彼にとって

その使命は恵みそのものなのです。彼はユダヤ人も異邦人も一つとされる福音の故に、この務めに召されているのであり、それは彼らに対する政治的あるいは人道的動機によるものでもないのです。したがって「すべての中で最もつまらない者であるわたし」と彼が言うとき、それは人と比べてのことではなく、ただ、神の恵みの大きさを知り、その恵みの大きさの前に自分の小ささを知っている者の言葉だと思います。

わたしたちはよく自分の小ささを口にします。それは美徳としての謙遜によるものです。しかし伝道に際しても、その小ささを語るのがわたしたちではないでしょうか。わたしたちが本当に知らなければならない「小ささ」とは、神の恵みの大きさに対しての小ささです。そして本当の小ささを知る者のみが、神の恵みの大いなることを、大胆に語ることができるのです。

それにしても、小ささを知るパウロに与えられた使命は、何と重大なものでしょう。パウロはそのことを語ります。「わたしは、この恵みにより、キリストの計り知れない富について、異邦人に福音を告げ知らせており、すべてのものをお造りになった神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画が、どのように実現されるのかを、すべての人々に説き明かしています」（8b～9節）。

パウロは、異邦人に伝える中身を、すなわち福音の中身を「キリストの計り知れない富」と言い表しています。富という言葉にパウロは、キリストの尽きることのない恵み、限りない救いの力を表現しているのです。その富を異邦人にもたらすことが、自らの使命であると語るのです。そして、先に彼が語った神の計画、すなわちキリストの和解の福音が、世の初めから創造者である神のご意志としてあり、今やそれが、キリストにおいて明らかにされていることを人々に説くという使命に、恵みによってあずかっていると語るのです。ここには、小さな者と大きな使命、そしてそこに明らかにされた大きな救いのみ業が語られるのです。

そしてパウロは、さらに驚くようなことを語ります。

「こうして、いろいろの働きをする神の知恵は、今や教会によって、天上の支配や権威に知らされるようになったのですが、これは、神がわたしたちの主キリスト・イエスによって実現された永遠の計画に沿うものです」(10～11節)。つまり、パウロの使命遂行によって、福音は人間の世界を超えて、天上の支配や権威にまでもたらされると彼は語るのです。しかも、それが教会によってというのですから、驚かざるを得ません。これは、当時のグノーシス主義者を念頭に置いてのパウロの言葉だと思います。というのは、彼らは絶対者なる神と創造者を区別して考え、キリストについても受肉や十字架に、歴史的、救済的な意味を認め

ない異端でしたが、彼らの天上界の霊的な存在にまで、神の知恵が知らされると語るのです。しかも教会によってというのですから、それはキリストが歴史的、救済的にいまし給う場、したがってキリストが正しく告白される場としての教会によって、ということだと思います。しかもそのことは、キリストによって実現された神の目的に沿うものであるとパウロは語るのです。小ささを知る者のみが語る大いなる神のみ業なのです。

このようにしてパウロは、ただ神の恵みによって生き、働く者なのです。

そのパウロだからこそ続けてこう語るのです。

「わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストに対する信仰により、確信を持って、大胆に神に近づくことができます」(12節)。

わたしたちは、教会においてキリストに結ばれているのです。その主キリストを信じる信仰によって、共にこの日本に生かされているのです。

パウロの言葉を読むと、何やら天上のことにまで話が及び、わたしたちのこの現実の生活には程遠いことのように思ってしまうかもしれません。しかし語られているのは、わたしたちの生きる教会のことなのです。だからわたしたちは、教会というものを聖書の示すところにしたがって、キリストの救いのみ業に照らして認識をするのです。さらにわたしたちは、

教会の出どころと本質をキリストの救いのみ業に見出しつつ、さらにこのキリストの体として、日本の中で、世界の中で、自らの使命を自覚し、歩まなければならないのです。そのときわたしたちは、パウロが言うように、大胆に神に近づくことができるのです。

このようにしてわたしたちは神に近づくことができるのだから、「だからあなたがたのためにわたしが受けている苦難を見て、落胆しないでください。この苦難はあなたがたの栄光なのです」（13節）とパウロは語ります。

パウロは今獄中にいます。彼は、たとえ自分の今の状況が苦難に満ちたものであったとしても、それは自分に恵みとして与えられている使命の故であり、さらにキリストの福音の故なのだから、自分を見て落胆してはならないと語るのです。これはパウロが自分の苦難に感傷的に満足し、誇張しているのでもなく、またエフェソの教会の人々に、苦難の要求をしているのでもないことは明らかです。

与えられた使命の故の労苦、福音のための苦難、それは使徒たる者の栄光であり、またその労苦に値するあなたがたの栄光なのだと語るのです。パウロは、自分の労苦、苦難を恵みそのものとして神に感謝し、そしてエフェソの教会の人々に、福音の故の勇気と希望と確信を与えるべくこう語るのです。パウロがこう語り得るのはなぜかと言えば、人々にとっては

恥である十字架が、唯一無比の栄光であることを彼は知っているからだと思います。パウロの労苦、それはまさに神のご計画の実現のための労苦であり、したがって教会の栄光なのです。パウロは、コリントの信徒への手紙一の中で、こう語っています。

「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」（一五・58）。

イエス・キリストの十字架の死と復活による神の救いの計画は、教会とキリスト者の伝道の業の根拠であり、支えであり、目標なのです。教会はこの神の計画に参与するために、召し集められ、この計画のために労苦することにおいて、常に新しくされ、希望に生きるのです。

（太田一彦）

一緒に考えましょう

設問一　真の伝道・使徒たる者の務めとは何であるかを話し合ってみましょう。

二　設問一を踏まえて、各自、また各教会の伝道の可能性・責任を具体的に話し合いましょう。

単元六　祈りにあふれる教会（三章14～21節）

はじめに　この単元の構成

一　祈る姿勢と相手（14～15節）
二　とりなしの祈り（16～19節）
三　頌栄と賛美（20～21節）

祈る姿勢と相手（三・14～15）

この単元の書き出しは、「こういうわけで」という言葉で始まります。これは、今までパウロが集中的に述べてきた「秘められた計画」をもう一度確認するのです。パウロの働きの中心は、いうまでもなく異邦人の救いです。ここでいう異邦人とは、イスラエルの救いの対象から除外されていた人たちのことです。しかし、パウロは、その異邦人がキリスト・イエスにあって共に救いにあずかる者となる、というのです（6節）。それが神の「秘められた

計画」であり、その計画の告知こそが異邦人にとっての福音です。同じことが15節以下の祈りでも繰り返し述べられます。

パウロは、祈りの内容に入る前に、14節でその前置きとして、ふたつのことを述べています。ひとつは「ひざまずく」という祈りの姿勢、もうひとつは「御父の前に」と、祈る相手を特定しています。それに続いて15節で、御父に関する説明を展開します。

そこで、まず「祈りの姿勢」についてです。パウロは、「わたしは御父の前にひざまずいて祈ります」（14節）といいます。当時、ユダヤ人たちはどのような姿勢で祈っていたのでしょうか。主イエスは、ルカによる福音書一八章で「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」（9～14節）を語っておられます。そこでは、両方とも「立って」祈ったことが記されています。当時は、立って祈るのが普通だったようです。ルカによる福音書には、ゲッセマネにおいて祈る主イエスご自身の姿を「ひざまずいて」（二二・41）祈られた、と伝えています。神に祈る形は、ある意味ではどうでもいいことかもしれません。人間は、うやうやしい格好をしながら、内面では自分を高める高慢な祈りをすることもできるからです。しかし、立つことが普通であった人が、ここではひざまずいて祈るというのです。心を尽くして祈ることが、自然にひとつの形をとって表れるということでしょう。その意味で、わたしたちも、わ

たしたちの礼拝が豊かなものになるように、礼拝の形などを整える必要があるでしょう。

次に、「祈りの相手」が誰であるか、ということです。パウロは、「御父である神に祈る」といいます。「御父の前に」という場合の「前に」は、御父に向かって近づく態度を現わすものです。したがって、「御父の前に」というのは、御父の面前に突っ立っている態度を示すのではなく、御父の前に近づいて行こうとする姿勢をいうのです。さらに、「御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています」（15節）と、御父についての説明が加えられます。ここには、「御父」（パテル）と「家族」（パトリア）が同じ語源から出ている言葉として、語呂合わせが成り立っています。

ところで、神を父と呼ぶのは、それほど多くはありませんが、旧約聖書の中にも見られます。そのひとつの例としてイザヤは次のようにいいます。

「あなたはわたしたちの父です。
アブラハムがわたしたちを見知らず
イスラエルがわたしたちを認めなくても
主よ、あなたはわたしたちの父です」（六三・16）

これは、主としてバアル宗教に立つカナンの地において、イスラエル民族と父なる神との

関係を明確にしたものです。しかし、主イエスが神を父と呼ばれる場合、もっと直接的です。それは、ヨルダン川における洗礼後の召命の経験によって、自分は神の愛する子、したがって天の神はわたしの父である（マタイ一〇・32）、という信仰的自覚に基づいているからです。

「父」というのは、人間関係の中で母と並んで一番親しいものとして、人間に対する神の根本的な在り方であることを、主イエスは示されたのです。そして、主イエスご自身がたびたび、この言葉で神に呼びかけられました（マタイ一〇・32）。さらに、主イエスは、信じる弟子たちに対して、「天におられるわたしたちの父よ」（マタイ六・9）と呼んで祈ることを教えられました。すべての者にとっての父である神を「わたしたちの」父よと親しく呼べるのは、イエス・キリストを信じる人たちです。イエス・キリストを信じるというのは、イエス・キリストが神の子であるという信仰によって救いにあずかると同時に、わたしたちもまた神の子になる力を与えられるということです。このように、神との人格関係をたえず保つことが信仰の命といえるでしょう。

パウロが、「御父から、天と地とにあるすべての家族がその名を与えられています」（15節）というのは、広い意味で、神が万物の父であることに由来しているからです。すなわ

ち、すべての者は父なる神のもとにひとつの家族として造られたのです。だからこそ、幾重にも分裂している今の世界にあってすべての者が、「父である神」のもとで、互いに兄弟姉妹となるために、「ひとつの家族」として集まるよう呼びかけられています。しかも教会を通してです。教会は神の家族のすべてのために「とりなしの祈り」をするのです。

とりなしの祈り（三・16～19）

その御父に向かってパウロは今具体的な人々のために祈っています。エフェソにいる兄弟姉妹のためのとりなしの祈りです。ここには、いくつかの願いが出ています。①「聖霊により」、②「信仰により」、③「愛により」、の三つです。

第一の祈りは、「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めてくださるように」（16節）というものです。パウロは、エフェソの信徒たちが「強められる」ことを願っています。一章15節で、彼らの信仰と愛の成長を聞き、神に感謝の祈りをしたパウロは、さらにその成長を願っているのです。その成長はどこからくるのでしょうか。それは、聖霊の働きによるのです。言い換えると、それは人間の能力によるものではないということになります。

「神の豊かさ」については、いろいろな形で出てきます（一・7参照）。神が豊かであるということは、人間にとってそれだけでも光栄です。なぜなら、人間について思うことは、人間にはたえず限界がつきまとうからです。持ち物だけでなく、信仰・希望・愛においてもわたしたちは限界があるのです。しかし、神は、そのような貧しい者たちを見捨てることなく、そのままの姿で受け入れ、認め、愛してくださる豊かさを持っておられるのです。そこに、真の「力」があり、その力は聖霊を通して働くのです。

それでは、その聖霊はどこにもっとも力強く働くのでしょうか。それは、「力をもってあなたがたの内なる人を強めてくださるように」（16節）ということから明らかです。「内なる人」については、ローマの信徒への手紙七章22節、コリントの信徒への第二の手紙四章16節にも出ていますが、その箇所では「外なる人」との対比で使われています。しかし、ここでの強調点は、精神的内面にあるのではなく、聖霊によって神と共に生きる生活へ導かれることです。そのことによって、より深い信仰と豊かな愛に生きる人へと成長するのです。そのような人は、いろいろな困難にぶつかってもそれを克服する力強い信仰生活ができるのです。そのような「内なる人」へと強めてくださるようにと、パウロは祈るのです。

第二の祈りは、「信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを

愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」（17節）というものです。パウロのこの第二の願いは、「信仰によって」与えられるものです。聖霊によって与えられるものは、信仰によって受けとめられます。ここではふたつのことが言われています。ひとつは「キリストが心の内に住んでくださる」こと、もうひとつは「愛に根ざした生活ができる」ことです。

「信仰によってキリストが住んでくださる」ということは、信仰がひとつの媒介者の役割を果たし、そのお陰でキリストがわたしたちの心の内に住んでくださるというのではなく、現にわたしたちの心の内に住んでおられるキリストが、信仰によって生き生きと生きてくださるという意味です（ガラテヤ二・20）。キリストが住んでくださる結果として、愛に根ざし、愛にしっかり立つ者となるのです。「根ざし」は植物を例にとった言い方で、「しっかり立つ」は土台を据えるという意味で、これは建築に関係した言葉です。この言葉を使うとき、パウロの頭の中には、建物としての教会のイメージがあったに違いありません。キリストの愛がわたしたちの内に深い根をもっていなければ、そういう愛は簡単に消えてしまいます。それゆえに、パウロは、キリストの愛が建築の土台のようにわたしたちの中で確かなものになることを祈るのです。

第三の祈りは、「キリストの愛によって」です。この祈りの目的はふたつあります。ひとつは、「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解」（18節）すること。もうひとつは、「人の知識をはるかに越えるキリストの愛を知るようになる」（19節）ということです。その前に「すべての聖なる者たちと共に」と書いてありますが、それは、キリストの救いが実現している教会において、と言い換えてもよいでしょう。

さて、「広さ、長さ、高さ、深さ」については、いろいろな解釈があります。ある人は、十字架を例にとって、十字架の縦の柱と横の棒を延ばすと、どこまでも伸びていって、地球の端から端まで及ぶと同時に、地球の深みから天の高みにまで広がるように、キリストの愛による救いは天を貫き、すべてを覆い尽くす、と説明します。アウグスティヌスは、広さは愛、長さは忍耐、高さは希望、深さは謙遜であるといいます。どんな罪人をもすべて受け入れてくださるキリストの愛の包容力。七の七十倍どころか、どこまでいっても尽きることのないキリストの赦しの忍耐。おかしがたい愛の高貴さ。汲み尽くすことのできない愛の深さ。いずれにせよ、人間に対するキリストの愛がどんなに大きいかをいうのです。教会には、その大きなキリストの愛が充満しています。

パウロは、このキリストの十字架の愛を念頭におきながら祈りの内容を展開しています。

わたしたちも日常生活の中での祈りの広がりを願わずにはおられません。

それにしても、このキリストの愛の大きさを誰が知ることができるでしょうか。それは、まさに「人の知識をはるかに越える」と言わなければなりません。パウロがあえてこう言うのは、キリストの愛は、知識によってではなく、聖霊を通して、信仰によって受け止められることを言うためです。それが実現するのは、とりもなおさず教会においてです。

そこで、パウロは、これまで述べてきた、聖霊により、信仰により、愛による三つのステップを踏まえつつ、「ついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように」（19節）と、この祈りをしめくくります。「神の充満」（プレローマ）については、すでに一章23節で説明しましたが、それは、神がすべてのすべてとなられるということです。その神の充満によって、教会のメンバー一人ひとりにいたるまで、あますところなく神の充満に満たされるように、と祈るのです。

教会は、すでに来られたイエス・キリストの初めの時を知っています。また、やがて来られる終わりの時を知っています。そして、そのふたつの「中間の時である今」を生きています。それゆえに、教会は、「既に」と「未だ」の「中間の今」を旅する神の民です。まさに途上を希望をもって生きるのです。それは、信仰においても、愛においても言えることで

す。それゆえに、パウロは、わたしたちのために「とりなしの祈り」をしているのです。この祈りの内容の豊かさに驚かされると同時に、わたしたちも神の充満に満ちあふれる祈りの教会とならなければなりません。そうであればこそ、力ある祈りがなされ、わたしたちの祈りがお互いに見える「とりなしの祈り」になるように工夫する必要があります。

頌栄と賛美（三・20～21）

最後に、パウロは、「頌栄と賛美」をもって一～三章をしめくくります。三章までに語られていることは、神は創造以来の目的をキリストにおかれ、それをキリストの体である教会を用いて実現される、ということでした。教会は、神のご計画の実現に用いられる光栄ある場なのです。そうであれば、教会が第一になすべきことは、神にすべての栄光を帰し、神を賛美することです。すなわち、教会はなによりも神を礼拝するところです。礼拝の対象は、聖霊の働きにより、「わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方」（20節）ですから、わたしたちに力強く働きかけてくださる父なる神です。事実、神のご計画は、キリストによって、異邦人の上にも広げられました。それだけでなく「はるかに超えて」、教会は宇宙の完成に向かって、さらに力強く待ち

望むことが求められています。

わたしたちの日本福音ルーテル教会は、来年（一九九三年）、宣教百年を迎えます。み言葉に立つ教会として、さらに深くパウロの教会理解を学ぶために、このエフェソ書を取り上げています。教会のなすべき第一のことは、神を賛美する生き生きとした礼拝がなされることですが、それと並んで大切なことは、神に希望をもって祈るということです。信仰・希望・愛といわれているように、希望は途上を生きる教会にとって、信仰や愛に劣らないほど大切なものです。神がわたしたちを信仰に召してくださった以上、必ずそれを実現させてくださるに違いありません。そこに全幅の信頼をおいて生きるのが、キリスト者の希望です。

21節で、パウロは、「教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン」と言います。神への頌栄と賛美は、常に教会とイエス・キリストにあってなされることが求められています。「世々限りなく」というのは、神の栄光がさらに加えられるためです。神に賛美が献げられるのは教会共同体においてです。わたしたちは、たとえ一人で祈っているときでも、決して孤立して祈っているのではなく、すべての聖徒たちと共に、キリストにおいて、永遠に献げられていることを忘れてはなりません。

（重野信之）

一緒に考えましょう

設問一　わたしたちが「とりなしの祈り」をしている対象はどのくらいの範囲でしょうか。キリストの愛に基づく祈りをどう展開したらいいか、話し合いましょう。

設問二　わたしたちはひとりで祈っているのではありません。祈りがお互いに見えるようになるためには、どのような工夫が必要か、話し合いましょう。

単元七　一致によって成長する教会（四章1～16節）

はじめに　この単元の構成

一　「一致」の勧め・「一致」とは何かⅠ（1～6節）
二　「一致」の勧め・「一致」とは何かⅡ（7～10節）
三　「一致」によって成長する教会（11～16節）

これまでパウロは、教会というものを「教え」という点に重きを置いて語ってきました。少々難しく言えば、教会論を展開してきたわけです。そしてパウロは、そこで展開した教会論の基をはっきりとキリストご自身に見出していたことが、この手紙の前半部一～三章を読むと判るのです。パウロがこれまで語ってきたこと、それは神は御子イエス・キリストを万物の上に頭（かしら）として教会に与えられたということ、したがってキリストが教会の頭であるということです。では神は何のためにそうなさったのでしょうか。それは、罪の故に

死んでいたわたしたちをこのキリストと共に生かしてくださるためなのだとパウロは言うのです。そしてそのことを踏まえて、パウロは四章から今度はそのキリストに連なるわたしたちは一体どのようにしてその神様の目的にあずかり、その神様の目的を実現していったらよいのかということを語り始めるのです。つまり、わたしたちはそのためにどのように生き、また生活していかなければならないかということが語られていくのです。その「勧め」の始めの部分が今回の箇所です。ではパウロは何をわたしたちに「勧める」のでしょうか。早速ご一緒に聖書を読んでいくことに致しましょう。

「一致」の勧め・「一致」とは何かⅠ（四・1～6）

パウロはまず「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます」（1節a）と言って語り始めます。「主に結ばれて囚人となっているわたし」という言葉がまずわたしたちの目に飛び込んできます。パウロが自分を「囚人」と呼ぶことは三章1節にも出てきましたが、パウロはここでも自分をキリストの囚人と自己規定するのです。きっと彼にとって自分がキリストの囚人であるというのは、自分のすべてを語り尽くしている言葉に違いありません。そのことの中に、彼は本当の救いと自由があることを知っていたので

す。とすれば、これから語ろうとする事柄は決して自分から出たことではなく、主ご自身からのものであるとあなたがたは思ってくれてよい、否、そう思ってこれから語るわたしの言葉に耳を傾けてほしい、そういう思いがこの「主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます」という言葉に込められているように思います。

では、パウロは何を私達に「勧める」のでしょうか。

「神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩みなさい」（1節b）。パウロは神様の召しにふさわしくわたしたちが歩むこと、それがわたしたち教会に連なる者のなすべき第一のことであると語るのです。それが、わたしたち信仰を与えられた者の生き方、生活の第一歩だとパウロは語るのです。考えてみればパウロは、あのダマスコ途上でキリストに捕らえられ（言行録九・1～19、フィリピ三・12）、そして異邦人伝道へと召されてゆくのですが（ローマ一一・13、一五・14以下）、それはパウロにとって神からの恵み以外の何ものでもないのです。そのパウロが、あなたがたは「神に招かれたのですから、その招きにふさわしく歩みなさい」と語るとき、その「招き」とは神の恵み以外の何ものでもないということ、だからその恵みを与えられた者としてふさわしく歩みなさい、とパウロはわたしたちに語っているのだと思います。

では、わたしたちが神の恵みによって招かれた者としてふさわしく歩むにはどうしたらよいとパウロは言うのでしょうか。

「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」（2～3節）。パウロはまずここで「謙虚」「柔和」「寛容」「忍耐」と四つのことを掲げます。彼は、それらが教会の中での平和の実現のために大切なことであり、その平和こそ、教会の一致の基となるのだと語るのです。そしてそのことが、霊による一致を実現することになると語るのです。霊による一致というのですから、言いかえればその一致は、み霊の働きによってもたらされるということであり、したがってわたしたちは一つとなってみ霊の働きを求めることに努めなければなりません。

しかしわたしたちは、このパウロの言葉を聞くとき、特に先の四つの事柄を聞く時に、安易に受けとるのではないでしょうか。というのは、どれもパウロの口から聞くまでもなく、日常生活の中でわたしたちにはわかりきっていることばかりだからです。例えば、日本人にとって、謙虚、謙遜は美徳として昔から大切にされてきたものだからです。しかしわたしたちは、ここでパウロが語ろうとしている本当の意味を見失ってはならないのです。では、パ

ウロは何を語ろうとしているのでしょうか。そもそもパウロがここで語ろうとしている「謙虚」とはどのようなことなのでしょうか。

そこでわたしたちが思い出すのは、フィリピの信徒への手紙二章6節以下のパウロの言葉です。「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」という言葉を聞くときに、わたしたちは彼の言う「一切高ぶらず」ということの意味を知らされるのです。キリストはわたしたちを罪から救うために、十字架の死さえも耐え忍ばれたのです。わたしたち罪人のために十字架の死を受けられた。それは徹底した、まさにキリストだけが可能な、徹底した「へりくだり」です。そのキリストによって救われたわたしたちですから、わたしたちもこのキリストの故に、「一切高ぶらず」「へりくだる」のです。このキリストこそ、わたしたちを他者と共に生きることへと招きたもう、神の言葉そのものなのです。わたしたちは、その故に生涯を貫き、キリストに柔順に従い、またその故に、他者を愛し、他者に仕えるのです。

そのためには、「柔和であること」「寛容であること」「忍耐すること」が必要となるでし

よう。主は言われました、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」（マタイ一一・29）と。「わたしに学びなさい」とは、キリストご自身を学ぶことです。このお方が救い主であることを知るということであり、このお方によって私が救われていることを知ることです。つまりパウロが、「一切高ぶらず」「謙虚」でありなさいと言うとき、それはわたしたちにつきつけられた命令ではなく、キリストによって基礎づけられた、すなわち、恵みに満ちた招きであるのです。

「寛容であること」も同様です。「一切高ぶらず、柔和で」ある者は、「寛容」になるのであり、そのためには、「忍耐」深くなるでしょう。「愛をもって互いに忍び合う」ようになるでしょう。

さて、ここで忘れてはならないことがあります。それは、パウロはこの手紙をエフェソの教会の人々に宛てて書いているということです。しかもこの手紙は〝教会〟に集中して書かれているということです。したがって、いま学んでいる信仰者の生き方というとき、それはまず〝教会における〟ということであります。したがってこれらの事柄は教会の中に実現される平和の基となるのだとパウロは語るのです。「平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい」（3節）。そしてこの平和はわたしたち一人ひとりが共にきずなで

結ばれることによって与えられるものなのです。この「きずな」という語は、「束ねられる」という意味を持っています。つまりわたしたちを召してくださったキリストによって、一人ひとりが「束ねられる」とき、そこに平和が与えられるのです。そしてそれは、「み霊」の働きによって実現するものであり、したがってわたしたちはそのために「み霊」の助けを祈り求めなければならないのです。「霊による一致を保つように努めなさい」とは、そのように教会は一つにならなければならないということ、そのことが許されているということです（イザヤ五七・15、六六・2）。

ではそのような教会の一致は何によって基礎づけられるのでしょうか。パウロは言います。「体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです」（4節）。一つなる教会、一つなるみ霊による教会、そのように教会が一つであるということは、そこに連なる者は皆同じ望み、一つの望みを持つのであるとパウロは語るのです。

ではその一つなる望みとは何でしょうか。それは「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ」（5節）ということです。ではなぜ主が一人、信仰が一つ、洗礼が一つであることが、わたしたちの望みとなるのでしょうか。それは、罪の故に死んでいたわたしたちを救い、生かし

てくださるのは主イエス・キリスト以外にないからです。そしてそのように、主が一人なるお方であるなら、その主イエス・キリストを信じる信仰は、一つなのであり、したがってわたしたちは一つなる洗礼によってこのキリストの死と復活にあずかり、キリストと共に生きることがそこから始まるからなのです（ローマ六・3以下）。だから望みなのです。そこにはわたしたちを造り給う神のみ心があり、それはわたしたち信仰者のみが知ることができる事実なのです。パウロはその神を「すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます」（6節）と語ります。

さて、神が唯一であられるということを、わたしたちはどれほど真剣に考えたことがあるでしょうか。「神々」の日本に生きるわたしたちにとって唯一の神を信じるとは、どういうことなのでしょうか。

考えてみれば、〝一神教〟といわれる宗教は多くあるのです。例えばイスラム教は徹底した一神教です。それなら、神が唯一なるお方であるとはどういうことなのでしょうか。パウロがここで「神は唯一であって」と語るとき、それはどのような意味を持っているのでしょうか。彼はコリントの信徒への手紙一・八章5節以下でこう語っています。「現に多くの

神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれるものがいても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです」。つまりわたしたちを救うために十字架に死に、三日目に復活し給うた神の独り子主イエス・キリストの故に、神は神であられ、神は唯一であられるのです。そのことをわたしたちは忘れてはならないと思います。このことをわたしたちがしっかりと踏まえるとき、他の宗教を信じるか、あるいは何も信じていない人々と共に生きるときのわたしたちがとるべき態度がはっきりしてくるのだと思います。神ならぬ者を神とすることを断固拒否することは旧約以来のことです。このことをおろそかにしてわたしたちの信仰は全うできないのです。近代日本史の中でも神ならぬ者を神とせよと迫られたときわたしたちは自らを失ったことを忘れてはなりませんし、これからもその種の戦いは続くでしょう。わたしたちは、いかなる地上的権力の自己神格化や偶像化とも戦うという基本的態度に加えて、自由と人権への攻撃を企てる野望に対して、絶えず目を覚していなければならないのです。そして、その際、何よりも大切なことはその目を絶えず、わたしたち自身に向けるということだと思います。唯一の神を信じるわたした

ちが神を時流にかなう者としたり、それに合うように流用したりしてはならないだけでなく、自らを絶対者としてはいないだろうかということを、絶えず吟味反省しなければならないのです。よく「歴史は繰り返される」と言いますが、わたしたちが歴史を省みないとき、したがって何も学ばないとき、わたしたちは同じ誤りを繰り返すことになるのだと思います。さて、それでは、非神・非真理・非絶対者を押しつける者、自らを絶対とする者がもたらすものは、何でしょうか。それは、抑圧であり、差別であり、搾取であり、敵意ではないでしょうか。

しかし、唯一なる神を信じるわたしたちは、自らの信仰を相対化することのできる者です。わたしたちは、キリストにおいてご自身を唯一なる神として示されるお方を信じるのですが、信じる神は唯一・絶対でも信じているわたしたちの信仰、その理解する能力は絶対ではないのです。とすれば、そこから生れるものは謙遜ではないでしょうか。今日、他の宗教への謙遜さの大切なことは改めて主張されていることなのです。このことはわたしたち少数者が宗教多元的社会の中でスムーズに生き延びてゆく処世術的知恵として言われていることではなく、また宗教的優越感からのことでもないことは言うまでもありません。

わたしたちが、唯一なるお方から示されるもの、それは批判と謙遜です。

「一致」の勧め・「一致」とは何かII（四・7～10）

教会における一致をこれまで語ってきたパウロは、さらにそのことを続けて語ります。今度は何が一つだと彼は言うのでしょうか。それは恵みです。ではどのように恵みは一つなのでしょうか。

「しかし、わたしたち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています」（7節）。パウロによれば教会は一つの説、感情的な傾向、社会的な関係によって一致がもたらされるものではないのです。教会の一致は〝画一〟化することによる一致ではなく、〝多様性における一致〟なのです。したがって教会に連なるわたしたちはそれぞれ独自性を持つのです。パウロによれば、わたしたちはキリストのみ旨に従って、一人ひとりにキリストから賜物が与えられているのです。キリストによって異なる賜物が与えられた者が互いに補い合い、有機的に結びつくのです。つまり教会の一致はこのそれぞれの賜物の〝相違を貫く恵みの一致〟によるということがここで明らかにされているのです。その賜物の基である恵みは、一つなのです。そしてその賜物の多様性を貫く恵みの根拠は、主イエス・キリストにあるのです。そのことをパウロは8節で、詩編六八編19節を基にした引用をしなが

ら、語ろうとしているのです。「『高い所に昇るとき、捕らわれ人を連れて行き、人々に賜物を分け与えられた』と言われています」（8節）。そしてパウロはそれを受けてこう言います。「『昇った』というのですから、低い所、地上に降りておられたのではないでしょうか。この降りて来られた方が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも更に高く昇られたのです」（9～10節）。パウロはここで、「昇る」「降りる」という言葉でキリストのみ業を明らかにし、主の受肉と十字架と復活を示し、先の恵みの根拠がキリストにあることを語るのです。しかも「すべてのものを満たすために」と言って、わたしたちがどんなときにもこの主を信じることができることを語るのです。

「一致」によって成長する教会（四・11～16）

さて、キリストによる賜物の豊かさが教会の中における職務として教会に与えられているとパウロが語るのが11節です。「そしてある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです」。この言葉を読んで、わたしたちが注意しなければならないことは、パウロはこれらを職別、階級、制度という意味で語っているのでは決してないということです。ではパウロはこれらを掲げて何を語ろうとしているのでしょうか。

その答えは、次に続く彼の言葉を聞けば明らかになります。「こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆ」くのである（12節）。つまりパウロはそれらが教会的あるいは内的なものであり、「キリストの体を造り上げ」るために備えられているのだということを示そうとするのです。身分としてではなく、務めとして与えられているということです。すなわち、教会に連なるわたしたちすべての者は、キリストによって一つとされ、整えられて、キリストの体なる教会を造る神の目的にあずかるために、それぞれ務めが与えられているのです。そしてそれぞれが、与えられた務めに応じて奉仕の業をなし、こうしてキリストの体なる教会が造られるのだということを、パウロは語ろうとしているのです。したがって、異なる賜物としての務めを与えられたそれぞれが、互いに補い合い、有機的に結びつくのが教会なのです。そして教会がそのようなものであるとき、「ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです」（13節）とパウロは語るのです。

教会がそのようなものであるとき、教会はわたしたち人間の側の主観的一致、宗教的一致ということによるのではなく、「神の子に対する信仰と知識」、ガラテヤの信徒への手紙のパ

ウロの言葉を借りるなら、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしのうちに生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」（二・20）という確信において一つとなるのだということです。すなわち、キリストの十字架と復活による救いの事実によって、一つとなるのです。その一致の中で、この救いの故に、わたしたちはどんな時にもこの救いを確信して立つことのできる人間として、キリストの持っておられる豊かさに生かされる人間として成長するのです。そしてこの一致の故に、「こうして、わたしたちは、もはや未熟な者ではなくなり、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたりすることなく、むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます」（14～15節）。わたしたちはもはや微動だにせず、キリストの愛における真実に固く立ち、ただ福音の真理を語り、一致の基たる頭なるキリストに向かって成長するのです。一体これにまさる希望が他にありうるでしょうか。

パウロは最後にこう語ります。このようにして教会は、この「キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによって、しっかり組合わされ、結び合わされて、おのお

のの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです」（16節）。ここに、わたしたちの教会の完成が約束されています。神はイエス・キリストを万物の上に頭として教会に与えられました。したがってキリストが教会の頭であり、教会はキリストの体です。そして神がそうなさったのは、罪の故に死んでいたわたしたちを救い、このキリストと共に生かしてくださるためでした。

では、どこでわたしたちはキリストと共に生かされるのでしょうか。それは教会においてです。わたしたちは、このキリストの体の中で生かされるのです。しかも、その教会を建てることにおいてわたしたちは生かされるのです。もちろんそのみ業をなさるのは神ご自身です。それを完成なさるのも神ご自身です。しかし驚くべきことは、土の器であるわたしたちを、神はその目的のために参与させてくださるということです。そしてそのことの中で、わたしたちは共に生かされるのです。パウロの言葉を通して、この事実を知らされるとき、一体誰が感謝せずにおられるでしょうか。賛美せずにおられるでしょうか。　**（太田一彦）**

一緒に考えましょう

設問一　各個の教会の形成・成長という視点から「画一ではなく、多様性を貫く恵みの一致」ということを話し合ってみましょう。

設問二　各個の教会が持つ固有の「多様性」と責任をそれぞれの教会が置かれた状況を踏まえて話し合ってみましょう（地区・教区全体が成長するために）。

単元八　キリストに倣う教会（四章17節～五章20節）

はじめに　この単元の構成

この箇所は、以下のように分けて学んでみます。

一　エフェソの信徒への手紙の基本的視点

二　キリストを着る　（四・17～32）

三　神に倣う　（五・1～5）

四　光より闇に遣わされて　（五・6～20）

エフェソの信徒への手紙の基本的視点

この手紙の学びも、もう半ばを過ぎました。ここまできてお分かりになったことと思いますが、エフェソの信徒への手紙は、壮大な神の創造の世界の一致と完成をその根底においています。この社会の中でのわたしたちの生き方はどうかとか、人間関係をどう調和させるか

などという小さなことでなく、神の世界の中でのわたしたちの生き方が示されています。「キリストにおいてお決めになった神の御心により、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、天にあるものも地にあるものも、頭であるキリストのもとに一つにまとめられる」（一・9～10）というのです。「まとめられる」という訳語はわかりにくい。「キリストにあって一つに帰する」（口語訳）という言葉がいいと思います。キリストにあって、神の創造のみ業が完成する、成就するというのです。

天地宇宙すべてのものがキリストにあって一つとなるというのが、神さまのご計画であり、その目標に向かってわたしたちは生きているのです。これは、第一章において学んだところですが、もう一度、見てみましょう。

神さまのご計画は、聖書では大きく三つに分けて述べられています。創世記の一章から一章までには、神さまが世界を造り、人間はその神の世界の守り手として造られたということが記されています。ところが、人間は、神の世界を自分のものにし、自分が神になろうとしました。これが罪の起源であり、その結果、人間は、神の世界の破壊者となったのです。アダムとエバが、食べてはならないとされた「善悪を知る木の実」を食したこと（創世記二・15～17、三・1～6）、カインが弟アベルを殺したこと（同四・1以下）、すべての人が

悪に走り、地に暴虐が満ち、ついにノアの洪水に至ったこと（同六〜九章）、塔を建て、その頂（いただき）を天に届かせようとしたバベルの塔の物語（同一一章）は、この神の世界をおのがものにしようとする人間のもくろみと失敗の出来事です。これは、いまも人間に続いています。チェルノブイリの原子力発電所の爆発、クウェートの油田の炎上、オゾン層の破壊など、いまや人間は世界的規模で、宇宙的広がりで、神の世界の破壊をしているのです。わたしたちは、アダムの原罪を引き継いでいるのです。パウロは、しかし、人間のこの罪にもかかわらず、イエス・キリストにおいて、神さまが神の世界を守りぬき、一つに帰せしめるのだと言います。

創世記の一二章から旧約聖書のいちばん最後のマラキ書までには、神さまがイスラエル民族を興され、これに神の世界の守りを委ねたことが記されています。天地を創造された神さまは、人間に世界の守りを任せられました。ですから、アダムやエバなど、すべてのはじめの人間が神の世界の破壊者となっても、新しく人を選んで、神の世界を守らせねばなりません。そこで、アブラハムという人からひとつの民族を興して、これに人間創造の目的を果たさせることにしたのです。神の世界の守り手とされたのです（創世記一二・1〜3、イザヤ四二・6〜7）。

しかし、イスラエル民族も罪を負った人間の群れですから、そのままでは、世界の守り手にはなれません。そこで神さまは、シナイ山でこの民と約束を結び（出エジプト記二〇章以下）、イスラエルが律法を完全に守れば、それによって神の世界の守り手として立つことができるとされたのです（出エジプト記一九・5～6）。ところが、イスラエル民族は律法を守らず、その使命を果たさず、それどころか、神の世界を自分のものにし、自分たちが神になろうとする罪に落ちてしまったのです。これが旧約聖書の創世記一二章以下に述べられていることです。パウロは、異邦人も含めて、新しいイスラエルがイエスによって興されることを訴えます。

新約聖書には、それでもなお神さまは人間に神の世界を託されたということが記されています。選民イスラエルが失格しても、神さまは人間によって神の世界を守らせようとします。それが神のみ心なのです。けれども、もはや世界の守り手となるべき人はいません。神さまは最後の手段として、ひとり子を下し、神が人間になられました。この人となられた神、イエス・キリストは、イスラエルの民に与えられた律法を完全に遵守し、それによって、神の世界は守られているのです。これが新約聖書に書かれていることです。

パウロは、さらにイエスを信じ、イエスに従う者は、イエスとともに世界の守りにつくと

言うのです。罪が赦されたということは、それですべてすんだということではなく、神の世界の守り手にふさわしくされたということです。神の世界の守り方があります。それは、武力や経済力によって守るのではありません。イエスがその生涯と十字架の死で示されたように、「仕える」ことによって、神の世界は守られるのです。こうして、イエス・キリストと教会が、神の新しいイスラエルと呼ばれるのです（ガラテヤ六・16）。

このことを前提にして、エフェソの信徒への手紙四章17節以下を学んでいきましょう。

キリストを着る　（四・17～32）

17節には、「主によって」勧めるとあります。「主にあって」、「主において」ということです。四章1節には「主に結ばれて囚人となっている」としてあります。

この勧めは、主のみ名において、主の権威によってなされると理解することもできます。主のために、いまローマの牢獄につながれているが、そこからこの勧めをしているというのかもしれません。いままでは罪と死のとりことなっていたが、いまやそこから救われ、むしろ主の囚人となった者として、パウロはこの勧めをしているのでしょう。はじめの勧めは、異邦人のように歩くなということです。異邦人とは、イスラエルに対する言葉ですから、神

の世界を守らない者のことです。神の世界をおのがものとし、自分が神になろうとする者のことです。テサロニケの信徒への手紙一の二章12節にあるように、「歩む」とは、「神のみ心にそって歩む」、すなわち、神の人間創造の意図にかなって、世界の守りにつくということです。

18節には、愚かな考え、暗い知性、内なる無知という言葉が出てきます。これは、人間としての使命を知らない無知、愚かさ、一章18節にあるように「心の目を閉ざされた」暗い思いということになります。「心のかたくなさ」という言葉が出ています。かたくなさというのは、堅い石のようなという意味から、無感覚の、マヒしたものということになります。異邦人のように生きるとは、罪の自覚もなく、キリストのあわれみにも無感覚な心をもって、神のいのちから離れて生きるということです。そこから放縦と、ふしだらな行いにふけるということが出てきます。

21節以下は、もうわたしたちは、異邦人ではなく、キリストに結びつけられ、新しいイスラエルになっているということを教えています（ガラテヤ三・27）。だから以前のような生活をやめて、新しい生活を始めるようにと勧めるのです。24節には、みんなが異邦人であったが、いまや神にかたどって造られた本来の人間に戻るのだということです（創世記一・26

～28)。本来の人間は、世界の守りにつくものです。

「滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て」、真理すなわち神の意図に従った「新しい人を着る」ようにとあります。脱ぐべきものは、神の世界を自分のものであるかのようにする、自己中心的な生き方です。着るべきものは、キリストに倣（なら）い、キリストに従う生き方です。それは、キリストがわたしのうちに、わたしがキリストの中に生きる生き方です（ローマ八・9～11、ガラテヤ二・20、コロサイ三・9～10)。

この脱ぐ、着るということは、困難なことです。生まれながらのわたしたちは、古い生き方、古い生活の在り方を脱ぎ捨てるのは困難です。そのために、神さまは、洗礼を与えてくださいました。わたしたちは、洗礼において古い衣服を脱ぎ捨て、新しいキリストの衣服を身に着けるのです。

25節からは、脱ぎ捨てるものと着るものとが並べられています。

脱ぎ捨てるべきものは、偽り、罪、怒りの持続、悪魔、盗み、悪い言葉、無慈悲、悪意、わめき、そしり、聖霊を悲しませることです。着るべきものは、真実、労苦、分かち合い、恵みの言葉、親切、憐れみ、赦しです。神の世界の守り手として、仕える生き方をするには、何が必要で、何を捨てるのかが示されています。

30節は、少し理解が難しいかも知れません。神の聖霊を悲しませるな、わたしたちには聖霊の保証があるというのです。神の聖霊を悲しませるというのは、古い生き方、異邦人の道を歩むことです。保証というのは、封印されている、イエスの焼き印を押されているということです（エフェソ一・13、ガラテヤ六・17）。もはや、神のものだから、そのしるしを付けられているのだから、古い生活には戻れないはずだと言うのです。そうして、この証印、焼き印というのは、洗礼のことです。洗礼を受けた以上は、もう古い生活には戻れない。イエスと共に、神の世界の守りにつくほかはないというのです。

神に倣う　（五・1～5）

五章に入ると、さらに、神の世界の守り手としてのキリスト者の生き方が述べられていきます。

1節には、「神に愛されている子供」だから、「神に倣うものになれ」とあります。四章14節に「未熟さ（子供らしさ）」を捨ててとありますから、無邪気な、単に愛らしい子供ということではなく、キリストの血でもって贖われた子供、キリストとともに悪との戦いを戦う子供です。神の世界の守りにつくということは、戦うことです。それには、神に倣うことが

必要です。神に倣うとは、神のかたちにかたどって造られた、本来の人間の生き方に従うことです。パウロは、コリントの信徒への手紙一の四章14～16節で、「わたしに倣え」と言っています。ペトロの手紙一には、キリストの「足跡に続くように」と勧められています（二・21）。いずれも、神の世界の守り手として、「仕える」生き方をするようにということです。

異教にというか、まちがった宗教にも、この「神に倣う」ということがあります。これは、人間が恐れ、不安、死の定めから逃れるために、神になろうとするのです。その儀式には、死と再生と、神格化が表されています。キリスト教の洗礼も、死と再生がこめられています。どこに違いがあるでしょうか。異教においては、恐れからの解放はありますが、生きる意味、根拠、生き方といった積極的な姿勢がないことです。聖書では、死と再生はあっても、人は神になることはありません。神に造られた本来の人間に戻るのです。ここで、神に倣うというのは、神になるということではなく、世界の守り手としてのキリストに倣い、キリストとともに世界の守り手として生きるパウロに倣うということになります。

2節には、キリストが、ご自身をわたしたちのために神への献げものとしたとあります。わたしたちの罪のために、十字架にかかられたことを表します。ヨハネによる福音書一三章

1節、一五章13節にあるように、命を捨ててまで愛を極めるキリストです。この愛から、わたしたちは離れることはできません。わたしたちを引き離すものはありません（ローマ八・35）。この愛に応えて、わたしたちも愛によって歩むのです。わたしたちも、キリストと同じ香りを放つと言うのです（二コリント二・14）。

3～5節は、偶像を礼拝するな、すなわち、神の国をおのがものとしたり、神の世界を破壊するようなことをするなということです。神の国の一員となったものは、その国のお客ではなくて、守り手なのです。じっとしていることは許されません。神の国は、神の世界以上に守られねばなりません。教会は、この地上における神の国です。まことの神の国の展示見本です。わたしたちは、教会のお客ではなく、教会を守ることによって、神の国の守りの見本、手本となるのです。

光より闇に遣わされて　（五・6～20）

6節には、むなしい言葉に惑わされると、神の怒りが下るとあります。救いと審きは、死後の、かなたの世界のことではありません。キリストに従うものは、すでに神の国に生きています。救いがすでに確かであれば、終りの日の審きが現在のこととして臨むのです。耳に

ここちよい、むなしい（根拠のない）惑わしの言葉に迷わされてはならないというのです。今日、多くの新宗教が世界を覆い、若者を惑わしています。わたしたちは、それに傾いてはなりません。

8～14節には、闇と光が対比されて出てきます。キリストは光そのものです。その方が、闇の世界に下ってこられました。

ここでは二つのことが考えられます。神は光です。光の源である神に背を向けると闇ができます。そこに悪が待ち受けています。ここでは、光りに向かって生きよ、そうすれば、おのずから神のみ心にかなった実を結ぶというのです。善意と正義の実は、賜物です。わたしたちが、造りだし、生み出すものではありません。

しかし、キリストが神から遣わされて闇の世に下られたように（ヨハネ一・4、5、9）、キリストに倣い、キリストに従う者も、闇に遣わされるということが起こります。イエス・キリストは光そのものでした。そのイエスが闇の世界に下り、人をそこから救い出し、神の守りに復帰させてくださるのです。なぜ、キリスト者にも苦難があるのでしょう。病気があるのでしょう。それは、キリストとともに、闇へと遣わされるからです。

16節は、「今の時を用いよ」とあります。用いよというのは、「買い占める」という意味が

あります。買い戻す、贖うという意味にとれます。今の時は、悪い時代、神の世界を破壊していく時代、この時を贖うのが、キリスト者の生き方です。教会は、自分の在り方を棚にあげて、しばしば時代を非難しがちです。キリストがわたしたちを十字架をもって贖ってくださったように、時を教会は贖う。世界を贖うのです。17節の神のみ心は、人間創造の本来の意図です。そのみ心に無感覚になるなということです。

18節の、「酒に酔いしれるな」も誤解の多い言葉です。突然ここに酒がでてくるのは、当時の他の宗教の祭儀が、酒に酔いしれることによって成り立っていたからです。いまなら麻薬になるかも知れません。「詩編と賛歌と霊的な歌によって」は、集会の持ち方です。異言とかいやしとか、いろいろな集会の持ち方があるかも知れません。しかし、わたしたちは、なによりも、聖書を読み、賛美歌を歌い、感謝の祈りをささげる礼拝を大切にしていきましょう。

この後には、具体的に、夫婦、親子、主人と僕といった問題が取り上げられます。しかし、日常的な、社会的な細々したことを整えていけば神の国が完成するというのではありません。もうすでにキリストが神の世界を守っていてくださるのだから、そのキリストに従っていくだけのことです。

（森　優）

一緒に考えましょう

神の創造された世界の守り手としてわたしたちが仕え得ることはどういうことでしょうか。その領域を具体的に話し合ってみましょう。

単元九　仕え合う教会（五章21節～六章9節）

はじめに　この単元の構成

この箇所は、以下のように分けて学びます。

一　聖書の読み方の基本
二　妻と夫　（五・21～33）
三　親と子　（六・1～4）
四　奴隷と主人　（六・5～9）

聖書の読み方の基本

聖書は福音を伝えます。福音とは、よきおとずれ、喜ばしいメッセージです。ところが、スイスの精神医学者ポール・トゥルニエは「福音書の律法が人を不愉快にする」と言いました。聖書は、そのまま素直に読んでいいのです。しかし、そのまま読むということは、聖書

に含まれている律法を受け取ることになります。あるべき姿、なすべきことを示されて、それに合わない自分をつきつけられ、絶望したり、不愉快になったりするのです。心を澄ませ、祈りをし、思いを聖書に集中し、心に聖書の言葉が響いてくるままに読むといいのですが、たいていの人が、その前の心責められる段階でやめてしまうのです。

聖書に記されているのは、イエス・キリストの福音です。ですから、イエスさまがこのわたしに何をしてくださったかということを考えながら読まなければなりません。

さらに、聖書はイエス・キリストによる救いの出来事を示すにとどまらず、わたしたちが、そのイエスさまの愛に応えて、従うことを求めていますので、このイエスに応えて自分がどう生きるかを考えながら読まねばなりません。

このエフェソの信徒への手紙の夫婦の在り方の箇所を、そのままに読むとどうでしょうか。相手に仕え尽くしきれない自分を見いだしてみじめになるでしょう。あるいは、妻に対してばかり期待が多すぎるとか、女性が男性に従属させられるのではないかと、不愉快な感じになるでしょう。

ここの内容の中心はイエス・キリストだとして、イエスさまが夫であり妻であるわたしに何をしてくださったかを読みとることが大切です。そうして、そこから、イエスさまの愛に

応えて生きるにはどのような在り方がいいかと読んでいくのです。では、イエスさま中心に学んでいきましょう。

妻と夫　（五・21～33）

はじめの夫婦であるアダムとエバは、土から造られました（創世記二・6以下）。だから、その結婚も土に帰るべきものです。ところが、エフェソの信徒への手紙では、結婚が、天の栄光にあずかるものとされています（五・27）。なぜアダムの結婚は土に戻り、キリストにある結婚は天に続くのでしょうか。

アダムとエバは、神の世界を治め、守るために造られました（創世記一・27～28）。しかし、この神の意図に背いたアダムとエバは、神の世界の守り手から失格してしまいました。その後の人類の歴史もすべて、神の世界の破壊者としての姿を示しています。わたしたちの結婚も、アダムとエバの末裔として、土から出て土に帰る、はかないものです。

キリストは、神の世界を守ることのできない人間に代わって、神自らが人となって世界を守られたのです。そのキリストにある新しい結婚は、もう土のものではない、天の朽ちない栄光に輝くものです。結婚が、キリストと教会の関係になぞらえられています。教会は、キ

リストの体であり、キリストの命の代価をもって贖われたものであり、これは、土のものではありません。これになぞらえられる結婚も、特別な聖なるものであり、安易に解消されるものではありません。

21節に、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」とあります。この「互いに」が大切です。決して、妻にだけ仕えることを押しつけているのではありません。互いに仕えることの現れが夫と妻では少し違うだけです。コリントの信徒への手紙一の一一章11～12節には、「主においては、男なしに女はなく、女なしに男はない」と、男女の相互依存が言われています。ガラテヤの信徒への手紙三章28節には、洗礼を受けてキリストに結びつけられたものは、「男も女もなく、キリスト・イエスにおいて一つである」と言われています。

22節に、妻に対する夫への服従が書かれています。しかし、これは、決して、一方的な屈従ではなく、キリストがわたしたちに仕えてくださったのだから、それに倣って互いに仕え合うようにというのです。キリストに仕える一つのかたちとして、妻は夫に従い、夫は妻を愛するのです。キリストを抜きにして、自然的な男と女の問題として考えたのでは、この箇所は理解できません。仕える姿をとられたのはキリストです。主が仕えてくださったのだか

ら、妻はそれに応えて夫に仕えるのです。キリストの姿にあずかる光栄を妻は与えられているのです。妻の自己喪失ではありません。

23～24節を見ましょう。ここには、「夫は妻の頭である」とあります。これに抵抗感を覚える人もあるでしょう。ここは、妻に言われています。夫に対して、あなたがたは妻の頭である。そのようにふるまえと言うのではなく、妻たちよ、夫につくすならば、主に仕えるように夫に仕えなさい。それによって、夫という神の世界の一部を守り、支えよというのです。

また、妻の在り方が教会になぞらえられていますが、これは逆に、教会の在り方の表現として、わたしたちは反省すべきでしょう。パウロが妻に求めている仕える姿を、わたしたちは、教会として主に対してとっているでしょうか。それよりも、キリストが先んじて教会に仕えてくださっていることに気がついているでしょうか。

妻は夫に従えということは、これだけです。この後は、長々と夫に対する勧めが述べられています。

25節には、夫は妻のために、命を惜しまず愛せよとあります。しかし、ここでも、キリストのことが先行しています。キリストは教会のためにご自分を献げられました。教会をご自

分の体とされました。それは、教会が何か特権的なものになったと考えてはなりません。神は、アダムに命の息を吹き込み、神の世界の守り手に任じました。神はイスラエルの民に律法を与え、神の世界の守り手に選びました。そうして、いま、神は教会に御子を与えて、神の世界の守りを委ねられました。ここでも、妻を神の世界の一部として守ることが望まれているのです。

26節には、「言葉を伴う水の洗い」とありますから、明らかに洗礼のことです。教会のしるしは洗礼です。教会は、洗礼を受けた者の群れです。心で信じていればそれでいいではないかという人もいますが、洗礼によらなければ、教会の一員でないことを明確に知るべきです。キリスト者である夫婦が互いに仕え合うことによって、教会が栄光に輝くと理解できます。わたしたちの夫婦関係が、教会の命を左右するのです。よい夫婦の関係を保ちましょう。

28節から30節までは、自分の体のように、夫は妻を愛すべきであるというところです。ここも、教会がキリストの体であるということに、つながっています。〝妻を愛するのは自分自身を愛する〟ことであると記されていますが、逆にすると、妻を虐げたり、つらくあたるのは、自分自身を傷つけていることになります。

人間は、心と体を含めて人間です。肉体的に体を守り養い、精神的には、死に至るまで信仰的成長を遂げなければなりません。しかも、夫婦であれば、ともどもに成長がなければなりません。それは、夫婦であることが教会にたとえられているように、夫婦は、〝キリストの体であり、教会の一部〟だからです。結婚するということは、キリストの体になることです。ここに、アダムとエバを越えた、キリストにある夫婦があります。結婚はキリストの体であるのに、どうして、キリストの体を損なったり、傷つけたり、分離したりできるでしょう。もし、夫婦の関係が破れれば、キリストに痛みが走るのです。

31節は、創世記二章24節の言葉であり、またマタイによる福音書一九章5節に出てくる言葉です。ここでも結婚関係が、教会を表しているというのです。結婚は教会であるというのが奥義であり、神秘です。結婚が土に帰るものでなく、天に続くすばらしいものだということです。わたしたちは、この結婚のすばらしさを見失っているのではないでしょうか。

33節は、これまで言われてきたことのまとめです。

親と子　（六・1〜4）

六章1—3節は、父と子に対する勧めです。十戒にしたがって、子が親を敬うということ

はわかります。しかし、ここには、父が子をいらだたせず、主にあって育てるようにと言われているのが大切なところです。

これは、子は親のものではない。神からの預かりものだということから出てきています。親が、神の世界の一部である子を、親のものにするところに、子をいじけさせたり、怒らせたりすることが起こるのです。親が子にとって神からのものであると同じように、子は親にとって神の賜物です。神さまが、わたしたちの父として、キリストを十字架につけてまで愛し通されたように、それを前提として、親としてのわたしたちがあることを知らねばなりません。

しかし、これは、親が子を甘やかすことではありません。キリストの愛と権威を受け継いで子を養い育てるようにということです。主の権威が重要です。

奴隷と主人　（六・5～9）

この箇所もキリスト抜きにして読むと、キリスト教は奴隷制度を容認しているのか、労働者を資本家の下におくのかという議論になってしまいます。人間の救いのために、自ら僕の形をとり、自分を捨てられたキリストの姿が前提です。

5節には、「奴隷たち、キリストに従うように、恐れおののき、真心を込めて、肉による主人に従いなさい」とありますが、8節まで奴隷への勧めが述べられています。コロサイの信徒への手紙三章22～25節に同じ意味の言葉が出てきます。テモテへの手紙一の六章1～2節には、主人がキリスト者である場合が記してあります。ペトロの手紙一の二章18～25節には、横暴な主人をもって苦しむ僕に対する言葉があります。テトスへの手紙二章9～10節にも奴隷に対する勧めがあります。フィレモンへの手紙16～17節は、オネシモという逃亡奴隷を、主人のフィレモンへ返す、有名な文面が残っています。こうした箇所を並べて読んでいけば、パウロの考え方がわかってくるでしょう。

まず、パウロが奴隷制度を容認していたとは考えられません。コリントの信徒への手紙一の七章21～23節には、自由になることを勧め、「人間の奴隷にはなるな」と訴えています。ガラテヤの信徒への手紙三章27～28節には、キリストにあっては、「奴隷も自由人もなく」、みな一つであると言っています。

わたしたちは、聖書を、自分に関心のあることに適用しようとします。自分の考えていることに応用しようとします。社会変革をめざす人は、それに合うテキストを聖書に求め、経営者は、その社訓を聖書からとります。自分にとって都合のいい箇所を、適当に抜き取っ

て、利用しているに過ぎません。しかし、聖書が求めているのは、全生活を神に献げることです。

もし、わたしたちが人間として造られ、いま生きていることの、神からの使命がはっきりすれば、その全生活がその使命に向けられねばなりません。そうして、聖書は、旧新約聖書を通して、わたしたち人間は、神の世界の守り手として造られたと言うのです。ただ、それだけではなく、神の世界の守り手からの脱落も告げています。さらにそれだけではなく、イエス・キリストが、まことの人として、神の世界を守りぬき、支えていてくださることを語っています。そうして、この世界の守り方は、力によってではなく、十字架によることが示されています。仕えることによってしか、神の世界は守られないのです。聖書は、神の世界の守りを言うのであって、単なる人間の社会の現状維持あるいは変革を言うのではありません。

こうしたことから、さも現状容認のように見えようとも、あらゆる生存の場で、神であるのに僕のかたちをとられたキリストに倣って、生きてみたらどうかと言うのです。まことの主人は、神のみであるということが出発点です。そこで、この奴隷への勧めの言葉が、現代における被雇用者というか、企業その他に働いている人々にもあてはまるのです。

この世の生き方や、社会の在り方を変えていけば、世界がよくなり、神の世界が完全になるように考えることはできません。わたしたちは、アダムの子孫です。神の世界の破壊者です。この地上を這いずりまわって生きているその生き方がそのまま天に通じるように考えることはできません。

キリストによって世界が守られているから、信じる者は、キリストに赦されて、キリストに従って、キリストとともに、神の世界の守りにつき、少しでも、この世界がよりよく保たれるように、あるいは少なくともこれ以上悪くならないように、仕えていかねばなりません。

9節には、奴隷をもつ主人への勧めがあります。「主人にも奴隷にも、同じ主が天におられ、分け隔てすることはない」という言葉があります。なんとすばらしい宣言ではないでしょうか。当時も今も、人間はそれぞれの神を持っています。自分にとって都合のいい神を仕立てます。民族は民族の、個人は個人の神を作りあげています。キリスト者であっても例外ではありません。ひとりの神を信じ、礼拝を忠実に守っていても、自分の生活を神に献げることなく、神の言葉を生活に応用することをしていれば、いつのまにか偶像崇拝に陥ってしまいます。唯一神信仰では十分ではありません。ユダヤ教でもイスラム教でも唯一神を信じ

ています。わたしたちの信仰は、キリストを信じる信仰です。キリストは、僕のかたちをとられた方です。そのキリストに倣って生きるようにということが、エフェソの信徒への手紙全体に流れています。

エフェソの信徒への手紙は、個人の生活の指針を述べているようですが、それは教会に包みこまれた生活です。個人の生活が神の教会の中に含まれています。夫婦、親子、奴隷とその主人、みなキリストの体の一部です。そうしてキリストは、その肉を裂き、心を裂いて、神の世界を支えておられます。わたしたちは、教会に包みこまれたものとして、どのように自分の肉を裂き、心に傷を受けて、キリストとも歩んでいくことができるのでしょうか。

（森　優）

一緒に考えましょう

エフェソ書五章21～33節は、伝統的な聖書の読み方（さらには内容そのもの）は女性差別的だったとの問題提起が「女性神学」からなされています。そこでは何が問題になっているのでしょうか。

単元九の本文と合わせて、次の「ある教会での聖書の学び」を読んで、男性も女性も共々にもう一度この聖書の箇所を読み直してみましょう。深く読み込むことで、また新

たな洞察を得て、教会の課題としても掘り下げて考えてみましょう。

なお、会話の中のAさんとCさんは女性、Bさんは男性です。

ある教会での聖書の学び

A　夫は妻の頭って何かしら。ここだけどうしても気になるんだけど…それに考えたらお互いに仕え合えと言いながら、なぜ夫には〝仕えなさい〟より〝愛しなさい〟って言って、言葉が違うのかしら？

B　ただ表現が違うだけじゃないですか？　愛するっていう言葉にも、神が私たちに〝心を尽くし精神を尽くし思いを尽くして、主なるあなたの神を愛せよ〟と言っているその「愛する」と、「仕える」というのと、同義語だと思ってたんだけどなぁー。それに後で子と奴隷には〝従いなさい〟という従属を示されているのに比べて、夫と妻には21節で〝互いに仕え合いなさい〟と別の言葉を使ってるでしょ。〝互いに〟っていうところには相互的な呼応関係がありますよね。

A　へぇー、夫婦は一応〝互いに〟っていう要素は入っているのね。でも奴隷はかわいそうだわ。昔だからしかたがないのかしら。でも今でも解決しているわけでもないしね。

B　確かにパウロはコリントの信徒への手紙一の七章21節から、〝召されたときに奴隷であった人も、気にせずそのままでいなさい〟と言っているように身分的な問題にまでは解放を呼びかけていませんね。やっぱり時代的な制約はありますよ。それで〝終末だ！終末が近い！〟と思って、主従関係は放っといたんでしょう。

C　さっきから聞いていたんだけど、私も加えて下さる？　Bさんに聞きたいんだけど〝夫は妻の頭〟っていうのには主従関係はないと思う？

B　うーん、僕もこの言葉だけは少々気になって。「愛する」と「仕える」が同義語としてもそこだけは浮いちゃうんだよなぁ。

C　私は、Bさんが差はないと言った「仕える」と「愛する」という言葉の表現の違いも、〝夫は妻の頭〟って言ったのも明らかに奴隷と同じく、妻と夫の主従関係を示していると思うわ。私は自称フェミニストなんだけど、このエフェソとかコロサイとか使徒の手紙によく出てくる、この女性への勧めが、今まですごく女性たちを苦しめて来たと思っているの。ちょっと長くなるけど、この前調べたことをちょっと紹介するわね。当時これが書かれた背景として、当時のローマの社会にはローマを支える家庭訓があったんです。それは社会的に上位の者へ従属している妻・子・奴隷が従うことにより、ロー

マっていう国家の家庭の秩序を保とうとした教えであったわけです。そしてそれをキリスト教的なものへと手直ししたものが聖書に出てくる家庭訓なわけなの。〝夫は妻の頭〟って言うのも、コリントの信徒への手紙一の一一章3節との関連で、男は女より神のかたちに近いとして、〝すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、キリストの頭は神〟。神―キリスト―男―女の序列の中で、女性は男性より劣った者として、そこに縛られているわけよね。聖書の中のそこここに見られる、例えば〝婦人達は教会で黙っていなさい〟とか〝エバが先にだまされて罪を犯した。しかし……貞淑であるなら、子を産むことによって救われる〟などの、女性がより欠けたものという表現と同じく、このエフェソ書も、女性に抑圧的に使われて来たから、その批判を持って読まないといけないと思うの。特に結婚式の式文で読まれるでしょ。そこへの問い直しをしている人々も出てきているみたい。

B　うーん、なるほど教会は社会の影響を受けやすく、歴史の中で社会の流れに迎合して共に罪を犯して来た危険はいくつもあったからね。エフェソの家庭訓もローマの家庭訓に影響を受けたに違いないなぁ。だけどですね、僕はちょっとまた違った見方だけど、二千年前当時は明らかに男尊女卑の中にあったと思いますよ。そして女性たちは肉

体的にも精神的にもとっても蔑まれていて、人権も無視され、自分がなかったでしょう。女は子を産む道具ぐらいにしか考えられていなかったかもしれない。そうするとパウロがここで言ったのは、そんなひどい女性観の中で「互いに仕え合ってゆけ。夫たちよ、暴力なんてもってのほか。妻の体は自分の体と同じように大切なんだ！　愛しなさい！」って、ここの、妻へよりも夫へ、長々と勧めているのを思うと、パウロはそこに強調点を置きたかったんじゃないのかな。ローマの家庭訓に迎合したように見えて、実は、それに「キリストと教会」という言葉を結びつけて、当時の夫婦の関係に大変革を起こした、その時としたら新しい進んだ画期的なものだったと僕は思って来たんだけど…。

A　あら、分量から言っても、確かに夫たちへの勧めの方が長いわね。フフフ。夫たちにもっと妻を心から愛してやれってパウロさんは言ってくれたのかしら。

C　当時にしては、パウロの言ったのは確かに革新的だったと思うわ。だけど彼には男としての限界があって、イエスさまが女たちを一人前の人間として認めてくれた、その一対一というよりも、女は男に守られる者っていう、依存関係から発言してしまったと思うの。ここだったら頭なんてある方がおかしいし、書くなら夫を妻に、妻を夫に置き

換えて、妻は夫に仕えよ、夫は妻に仕えよと二つ言って初めて、仕え合う姿が示されると思うのよね。今、女たちも依存せず自分の心の自立を望み、語り、行ない、イエスに仕えたいと思う時、男は女の頭なんて言われたら、その歩みを止められそうな気がするわ。今、女性たちは、様々な生き方を選びとって歩もうとしている。肉体的には一般に男より弱くてもイエスに従って行きたい、必死な女性たちが、結婚していてもいなくても、男と全く同じように心を燃やされているわ。

A　あのー、こんな時言うのおかしいんだけど私、神学校に行って牧師になりたいって少し思ってるんですね。だけど何だかすごく大変そうで…。どこの教派でも女性教職は少ないでしょ。やっぱり社会と同じように教会も女性を受け入れにくくしているのかなぁと感じるとき、ここでパウロさんの言って来たことは良かったのか悪かったのか。今は考えちゃうわ。あーパウロさんに会ってみたい。

C　聖書って、時代状況や背景を考えながら読むことって大切よね。そのまま字句通り受けとれば、誤った方向にも進んでいくわ。

B　僕もそう思うんだけど、せっかく与えられているテキストから、たとえ一見それが差別的に見えても、そこから何かを聞こうとする姿勢は必要だと思いますよ。

C　フェミニストたちは今までの女性のひどい痛みを知っていますからね。それに敏感になりすぎているきらいはあると思うわ。だから、必要なのは、女も男も共に、とことん、共にイエスに仕える姿を、今の現実の場から求め、テキストに問うていくことよね。そこは同感。

B　こんなに、他の人と一緒になって、突っ込んで聖書を読んだのは初めてだなぁー。受けとり方も各人、違いが出てくるもんだよね。

A　おもしろかったわ。いつも牧師先生からお話を賜っては「はい、それまで」だったけど、自分の場から自分の生き方を通して読むのは何より必要ね。私も自分の召命感と真剣に向き合ってこれから生きてみたいわ。そうそう、ルーテル教会も百年記念よね!?

（内藤文子）

参考文献

E・モルトマン＝ヴェンデル「イエスをめぐる女性たち」新教出版社　一九八二年
荒井　献「新約聖書の女性観」岩波書店　一九八八年
E・S・フィオレンツァ「彼女を記念して」日本基督教団出版局　一九九〇年

単元十　戦う教会＝わたしたち（六章10～24節）

はじめに　この単元の構成

わたしたちのエフェソの学びも最後にきました。パウロは第三回宣教旅行の帰途、ミレトスの港で、エフェソ教会の長老たちに最後の別れの言葉を述べています。この最後の言葉より、エフェソ六章の「最後に言う」以下が、エフェソ教会の信徒にとっては、パウロの最後の言葉になります。それは、第三回宣教旅行の後、パウロは捕らえられ裁判を受けるためローマに護送され、ローマの獄中で、この手紙を書いたからです。文字通り、「最後に言う」言葉になりました。もちろん、四章から続いてきた具体的なキリスト者の在り方の「最後の」言葉です。この単元は次の三段落にわかれます。

一　戦うキリスト者　（10～17節）

二　祈るキリスト　（18～20節）

三　結びの言葉　（21～24節）

戦うキリスト者　（六・10～17）

戦う教会、戦うキリスト者という言葉を聞くと、私たちはなんとなくアレルギー症状をおこすかもしれません。パウロは「キリスト・イエスの立派な兵士として」（二テモテ、二・3）と言って様々な軍隊用語を使っています。初代教会では軍隊に入隊する時の宣誓を表す「サクラメントゥム」という言葉が、教会の信徒になる洗礼を意味する言葉として用いられました。洗礼はキリストの軍隊への入隊宣誓式と考えられたのです。サクラメントは聖礼典を意味します。

このような教会の姿勢は、歴史の中でしばしば誤って捉えられてきたことがあります。十字軍がそうでしたし、世界伝道の名のもとに、聖戦とか正義の戦争として軍隊が派遣されたり、虐殺がなされたりしたこともあります。キリスト教は平和の宗教だと言われています。それだけに私たちは戦う教会とは何なのか、慎重に考えてみる必要があります。

10節。珍香も焚かず屁もひらずと言われるようなキリスト者ではなく、強くたくましい者であれと勧められています。やみくもに強いのではありません。「主に依り頼み、その偉大

な力によって強くなりなさい」と言われています。「主に」というのは「主の中にいて」、「力によって」というのは「力の中で」という意味です。「強さ」は自分ひとりが力みかえることではありません。主の中にこそ強さの鍵があるのです。パウロは「強さ」と「弱さ」について、コリントの信徒への手紙二の一二章1～10節に語っていますから、読んでみてください。

11～13節。戦う教会というけれど、戦いの相手ははっきりしているでしょうか。どうもはっきりしていない。捉えどころがないのです。「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」。敵はあいつだとすぐにわかりません。そこにこの戦いの困難さがあるようです。宮田光雄氏はこう言っています。「神の総武装は、広大な、宇宙的な力との戦いを予想していることであります。たんに、キリスト者の心の中における葛藤とか、われわれがしばしばおそわれる内的な誘惑という意味だけにとどまらない。むしろ、端的に言えば、外から加えられる攻撃であることを示しているのです」(『一粒の麦地におちて死なずば』、一四七頁)。「広大な、宇宙的な力との戦い」と表現しておられますが、あれが戦う相手だと特定しにくいのです。二千年前の人間の宇宙観や世界観があります。それについて、「天において権力を持

つ四つの霊とは、天の最下位層に住み、政府、支配者、公共機関などの地上の権力を制御し、あるいは動かしている超人的な存在と考えられていた」（フランシスコ会『パウロ書簡第三巻』、三一頁）と説明されています。現代人はこのような天にいる超人的な存在など信じていない人が大部分でしょうか。それとも、オカルト・ブームで、超人的存在の摩訶不思議を信じている人が多いでしょうか。その両者への宣教の務めが私たちにあるのですから、まさに信仰の戦いの困難さがあるのです。

これは偶像信仰、あるいは運命信仰に関わる問題です。エフェソでは「偉大な女神アルテミス」に関わる騒動がありました（使徒言行録一九・21以下）。コリントでも「偶像に供えられた肉」の問題がありました（一コリント八・1以下）。日本でも、星座は？　血液型は？　姓名判断は？　方角は？などと、なんでもないようですが、わたしたちが戦わねばならない運命信仰ではないでしょうか。

英語の聖書を見てみましたら、12節の戦いの相手について、ひとつずつ、「支配に対して、権威に対して、支配者に対して、諸霊に対して」というように、against となっています。これは戦いが十把ひとからげに戦う相手ではないことを意味しています。ひとつひとつの敵と戦うのです。そういえば、「戦い」という言葉も英語の聖書では「レスリング」となって

いました。取っ組みあいの汗みどろ血みどろの格闘という意味であります。レスリングは一対一の格闘です。

戦いの相手が血肉（人間）ではないからといって安心してはなりません。「あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことがありません」（ヘブライ一二・4）と言われています。悪魔は、血肉の中にも入ってきて、人間の行動や心の思いを動かすものなのです。イエスさまがフィリポ・カイザリアで、弟子たちの信仰告白を訊かれたことがありました。ペテロは大変お褒めにあずかりました。その後で、イエスさまが苦しみと死と復活について語り始められると、ペテロはイエスさまに「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と言ったために、イエス様から「サタン、引き下がれ」としかりつけられています（マタイ一六・13以下）。悪魔は血肉の中にも現れるものです。

現代人は、悪魔とか人間の外にあって人間を動かす宇宙的な諸霊の存在を信じていないようでありながら、テレビや雑誌などでは霊界の力とか奇術魔術の類いに感心し、幸福の科学のような教えにコロリと参るのです。キリスト教もあれに学ぶと教勢が伸びるのにと考えたりする牧師がいたり、伝道の目的は教勢進展にありという迷信にとりつかれたりしています。パウロは、このような何か解らない力は、キリストのもとに屈伏させられたと語ってい

るのです（エフェソ一・21）。

今日の私たちの戦いとは何でしょうか。宮田光雄氏がすばらしい言葉を書いておられますので、少し長くなりますが紹介しておきましょう。「わたしたち自身の戦いは、神話的な姿を持ったイメージで悪魔を思い浮かべる必要はないのです。現代における悪の勢力とは何か。ひじょうにわかりやすく言いますと、誤った理想によって人間の精神を統御しようとする力である。そのようなものは、たしかに現代の世界にうず巻いています。さまざまの政治的な世界観、イデオロギー、指導者崇拝、それらは、しばしば、政治思想の絶対化、指導者の神格化の形で、疑似宗教的な性格をとることさえあります。あるいはまた、わたしたちが現に、すでに陥りがちなさまざまの偏見。社会的な、あるいは階級的な、人種的な偏見のような悪の影響力を、ここで言う悪霊の作用とみても誤りではないでしょう。あるいは、わたしたちが人間の存在、この世の現実、あるいは自己自身をあたかも絶対的な価値のように考え、それこそ唯一の現実であるかのように考えて自己を絶対化する。このような見方もまた、一つの偶像礼拝であり、現代的な悪の誘惑と言ってもよいのです。だから、一般的に言って、誤った時代精神にたいする戦いこそが現代のわたしたちに要求されている信仰の戦いと見ることができる。神の霊（ガイスト）によって時代の精神（ガイスター）と戦うこと

が、ここで要求されている課題であります」（前掲書、一四八頁）。そして、宮田氏は靖国神社問題、天皇制の宗教性、在日朝鮮人問題、人種差別問題、部落差別問題などを課題としてとりあげています。このような戦いに取り組むとき、神の武具を身につけなければならないと勧められています。

14～17節。ある注解書には、事細かに武具の説明がしてありますが、それは二千年前は意味を持ちますが、今日では武具そのものの細かい説明は不必要と思います。まして、武具が攻撃用でなく、防御用だから平和的なんだというのは、自衛隊が専守防衛だというのと同じで、武器は武器なのです。二千年前のローマの軍人が身につけた武具を書き並べながら、キリスト者の依って立つ信仰の内容として、「真理・正義・平和の福音・信仰・救い・霊・神の言葉」などについて語られているのです。悪魔との戦いのために、なによりも真理が必要であります。「真理とは何か」というのはピラトの問いでもありました（ヨハネ一八・38）。真理は客観的な向こう側にある品物のようなものではありません。イエス・キリストはご自身、「わたしは真理である」（ヨハネ一四・6）と言われました。真理はキリストです。次に「正義」と訳された言葉は、「義」という言葉です。パウロは「神の義」を求めて戦った人です。彼はキリストが義であることを発見して救いを得たのです（ローマの信徒への手紙や

ガラテヤの信徒への手紙に記されている内容）。次の「平和の福音」は二章17節に出たところで、キリストがもたらしてくださったものです。信仰も救いも神の言葉もすべてキリストと結びついています。このようにみると、神の武具を身に着けるとは、頭の先から足までキリストによって武装していることなのです。キリストご自身が悪魔の試みに勝ちたもうたように、キリストで武装したわたしたちは、戦いに勝つことができるのです。

祈るキリスト（六・18～20）

信仰の戦いは、何か気張ったり、頑張ったりすることではないようです。どんな時にも、根気よく祈ることです。ここには特に〝霊〟というように強調されています。それは、この霊という言葉が原典ではわざわざ大文字で書かれているからであり、聖霊・御霊を意味しているのです。パウロは〝霊〟の執り成しについてこう言います、「〝霊〟も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、〝霊〟自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、〝霊〟の思いが何であるかを知っておられます。〝霊〟は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです」（ローマ八・26～27）。神ご自身が聖霊によって祈ってくださる

のです。イエスさまも祈ってくださるのです。ルカによる福音書二二章31～32節を読んでください。

右のイエス様の祈りについて筆者は次のような証しを記したい。「あれは高校三年の時だった。大学入試に失敗した僕は気分が晴れなかった。もう一度チャレンジするか、就職でもするかと悩んでいたのである。ある晩、数人の友としたたかに酒を飲んで帰ってきた。自分の寝床に入り、そのまま寝こんでしまった。翌朝早く目が覚めた。のどが渇くので水を飲みに台所に立った。まだ家族は寝ていると思っていた。そっと台所に降り立って息を呑んだ。母は起きていたのだ。一瞬何か言い訳を言わなけりゃと思って母を見た。そして二度息を呑んだ。母は台所のかまどの前にうずくまっていたのだ。『どうかしたの？』と声を掛けようとして、三度目の息を呑んだ。母はうずくまって祈っていたのだ。僕は、瞬間、『僕のために祈っている』と感じた。何を言っていいのかわからなかった。だまって水を飲み部屋に帰った。先に引用したルカ福音書の言葉は、主イエス様が弟子のペトロに語った言葉である。後になってこの言葉は、僕のために祈っている母の姿に重なっていった。聖書の中に出てくる弟子たちは、皆主イエス様の祈りに支えられて立ち直っていった者たちである。『あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい』という言葉は、弟子たちを伝道へ

と立ち上がらせた。僕も他者のために祈れるようになろう、あの人やこの人のために祈ることが僕の務めだと思っている。預言者の務めのような格好のよいことはなかなかできないにしても、祈ることはしたいと思う。僕も還暦を過ぎた。母も九十八歳になる。この本が出るとき健在かどうか。それは神のみ心の中にある」。

少しばかり個人的な事を書きましたがお許しください。パウロは、祈りなさい、祈ってほしいと言っています。祈っているとき、その人は信仰の戦いをしているのです。祈ってあげるとき、わたしたちは相手の人と共に戦っていることになるのです。祈ってくれる人があるということは、わたしたちを励ましてくれるのです。祈られているから祈ることを知るのです。

わたしたちは、「あなたのために祈ります」とはいとも簡単に言うけれど、言うだけで実際に祈っていないかもしれません。まして、「わたしのために祈ってほしい」とはなかなか言わないものです。身勝手すぎると思っているのでしょうか。言わないのが謙遜で美徳と思っているのでしょうか。パウロはそうではありません。はっきりと、祈ってほしい課題を示して、祈ってほしいと願うのです。

パウロは祈ってほしい内容にも言及します。「福音の神秘」をはっきり語れるように祈っ

てほしいと言うのです。この「神秘」という言葉は、一章9節に出てくる「秘められた計画」という言葉と同じです。これは何か解らないことだから「神秘」というのではなく、旧約聖書に示された神の救いの計画であり、それゆえに、「福音の神秘」なのです。この「の」というのは、福音＝神秘＝秘められた計画ということになります。それを語れるように祈ってほしいというのがパウロの願いです。パウロは、獄に捕らわれていますが、その困難と苦痛からの解放を祈ってほしいとは言っていません。福音を語れるようにというのが彼の願いです。

結びの言葉　（六・21～24）

新共同訳聖書は、21節以下を結びの言葉としていますが、21～22節は20節に続くとされています。わたしのために祈ってほしいと言ったパウロは、自分がどういう状況であるかを知らせるために、ティキコを遣わすと言っています。わたしのために祈ってほしいと言うとき、何を祈るかを具体的に知らせようとしています。パウロの手紙にはよく個人的な名前や消息が出てきますが、エフェソの手紙には初めてティキコという名がでてきます。彼の名はパウロの第三回宣教旅行の時、パウロの同行者の名前があげられているところに出てきます

（使徒言行録二〇・1～6参照）。パウロがティキコをエフェソに派遣する理由は二つです。ひとつはパウロの様子を知らせるためと（21節）、励ましを得るため（22節）です。「励まし」という言葉は「勧める」（ローマ一二・8）、「慰め」（二コリント一・4）というのと同じ言葉です。励ましは単に頑張れというようなものでなく、勧めを聞いて励ましを受ける、説教が励ましとなるような使者としてエフェソに派遣するのです。これはとても大切なことです。わたしたちは人間的な言葉でなく神の言葉の説教が励ましになるのだということを覚えて、礼拝や交わりの中心にみ言葉の勧めを置きたいものです。

最後は祝福でしめくくられています。兄弟たちにと、キリストを愛するすべての人にと、平和と愛と恵みがあるようにと祈られています。ここでも主イエス・キリストと結びついているのです。兄弟たちというのは、直接的な小さい教会の交わりかもしれません。すべての人というのはさらに広い交わりを指していると理解してよいでしょう。神の愛は狭い意味の教会の交わりの中にだけあるのではありません。兄弟姉妹たちからさらに、キリストを愛するすべての人にまで広がっていくのです。教会は教会員だけでなく、キリストを愛する人々も教会の柵の中において考えるべきです。キリストは、教会の頭であるのみならず、全世界の主でもあります。それが神のみ心の実現なのです。

（森　勉）

一緒に考えましょう

実際の生活の中での信仰の戦いはどのようになされていますか。祈りはどうですか。具体的に考えてみましょう。またそこでの失敗と成功を思い出しましょう。

あとがき

「聖書のみ」は宗教改革のとき以来の「恵みのみ」「信仰のみ」と並ぶわたしたちの教会の旗印でした。宗教改革が「聖書のみ」を作り出したのではなく、「聖書のみ」が宗教改革をもたらしたのでした。外国でも日本でもいつも深い聖書の学びが、人間と教会に新しいいのちを吹き込んできました。

宣教百年を迎えるわが日本福音ルーテル教会もまた新しいいのちを求めています。新たに神の息吹が吹き込まれるのを切望しています。今の時代にあって、この日本という社会の只中で、キリストの教会がみずみずしい信仰に生かされ、いきいきとした証しの生活を送っていくことは、やはり聖書に聴き、学ぶことを通して初めて可能になるのです。今回、宣教百年を期しての伝道運動の大切な柱のひとつとして全国の教会が足並みを揃えて二年間「聖書の学び」運動をおこなうことは、ルーテル教会がどこに立っていくのかという決意を示しています。

この運動を始めるにあたり「聖書の学びのための手引書」を発行することを決めてから刊

行までにはわずかな時間しかありませんでしたが、五名の先生方にはきわめてご多忙な伝道牧会の生活にもかかわらず、数回の集まり、研究と執筆、再三の書き直しと推敲をしてくださり、心から感謝します。

また、今回は教会で用いる「手引書」を作り上げる過程にぜひとも、聖書を学んでそれを実際に生きていく信徒の方々の声を反映させたく、公開聖書研究会と原稿検討会を開催したところ、関西地区宣教協議会のご協力をいただき、多数の信徒の方々が熱心に参加してくださり、貴重なご意見を述べてくださいましたことは、特筆して感謝申し上げます。当日出席はできなかったけれど、女性の立場から聖書を読むことの必要性を強く訴えてくださった方もあり、有益なご示唆をいただきました。

内藤文子牧師にも、聖書の学びを多角的に深めていくための手掛かりになる一文を草していただき、ありがとうございました。

再三会場を提供していただいた大阪教会にもお礼申し上げます。

本書の企画を練る段階では、東教区の教職グループの構想を参考にさせていただきましたことを記して感謝申し上げます。

編集の実務の労を取ってくださったのは、執筆者のひとりでもある太田一彦牧師でした。

本書はひとりで読むこともちろんできますが、同信の兄弟姉妹との語り合いのなかでこそ聖書のみ言葉へのさらに深い傾聴ができることと信じます。そこに教会があります。

願わくは、本書が広く全国の教会で用いられ、エフェソ書が熱心に学ばれるための手助けとなり、今日この世界の中で主キリストが望まれる教会の姿、あり方を共に学ぶために役立ちますように。

それぞれの教会でのエフェソ書の学びの成果が全国の教会とも分かち合われていくようにしましょう。さらに来年度に予定しているルカによる福音書を通しての宣教論の学びへと発展していきますように。

幾多の願いを込めながら、本書をお手もとにお届けいたします。

教会の主イエス・キリストの平和を祈りつつ。

一九九一年待降節

日本福音ルーテル教会
宣教百年記念事業室にて
江　藤　直　純

「エフェソ書」聖書研究のための参考文献

聖書

「新共同訳」（日本聖書協会、一九八七年）「口語訳」（同、一九五四年）のほかにも多くの日本語訳があり、それぞれ特徴があって役立つ。とくに、フランシスコ会聖書研究所訳注「新約聖書」または分冊「パウロ書簡Ⅲ」（中央出版社、一九七八年）は解説、注ともに充実している。外国語の聖書も参考になる。

ギリシャ語原典を読めなくても、異なる翻訳を読み比べることで、一冊だけ読んでいたのでは得られない洞察が与えられることも多い。

緒論

荒井献他「総説　新約聖書」日本基督教団出版局　一九八一年

G・ボルンカム「新約聖書」佐竹明訳　新教出版社　一九七二年

土戸　清「現代新約聖書入門」日本基督教団出版局　一九七九年

注解書

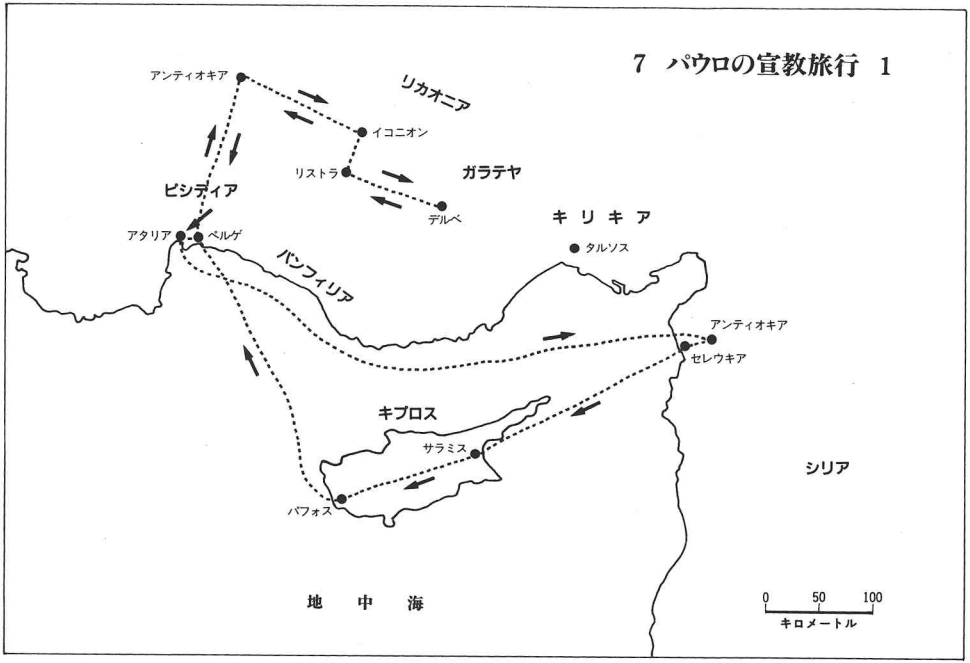
「新共同訳新約聖書注解Ⅱ」日本基督教団出版局　一九九一年

（「新共同訳聖書」のために最新の研究成果を踏まえて書かれたもの）

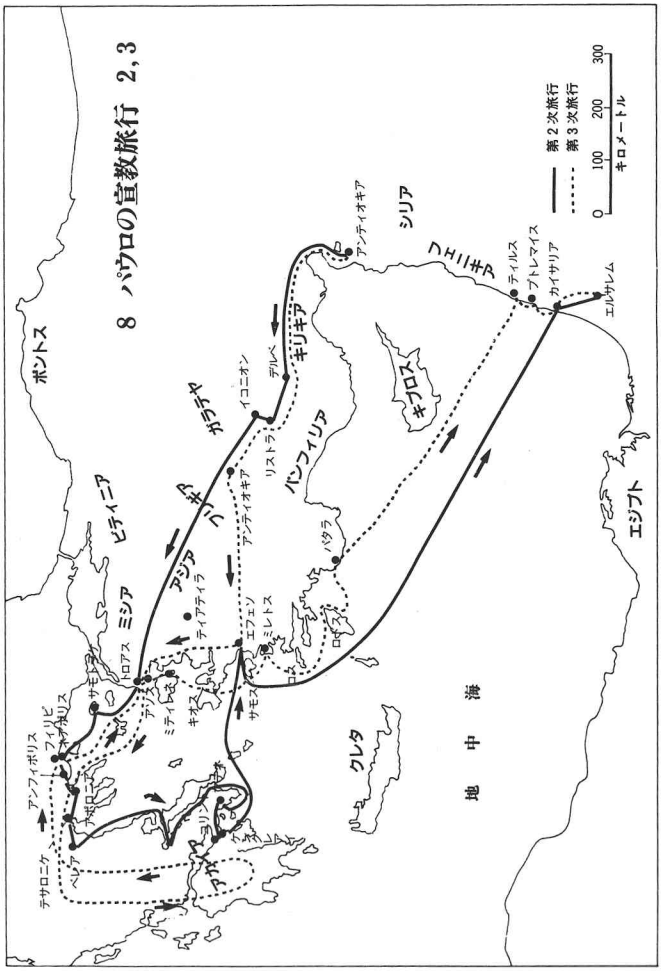
「信徒のための聖書講解」シリーズの石田順朗他「エペソ人への手紙・ピリピ人への手紙・コロサイ人への手紙」聖文舎　一九六一年
山谷省吾「パウロ書簡・新訳と解釈　エペソ・ピリピ・コロサイ・ピレモン」新教出版社
ほかにもシリーズものの中にエペソ書の分が含まれている。
W・バークレー聖書注解（ヨルダン社）、ＮＴＤ新約聖書注解（ＮＴＤ新約聖書注解刊行会）、シュラッター聖書講解（新教出版社）、聖書講解全書（日本基督教団出版局）、説教者のための聖書講解（日本基督教団出版局）、「新聖書注解」（いのちのことば社）
一巻本では、「新約聖書略解」（日本基督教団出版局）、「カトリック聖書新注解書」（エンデルレ書店）

説教集他

浅井正三「祈りと働きを支える信仰　エフェソの教会への手紙と主の祈り」女子パウロ会
榊原康夫「エペソ人への手紙」いのちのことば社
竹森満佐一「講解説教　エペソ人への手紙」新教出版社

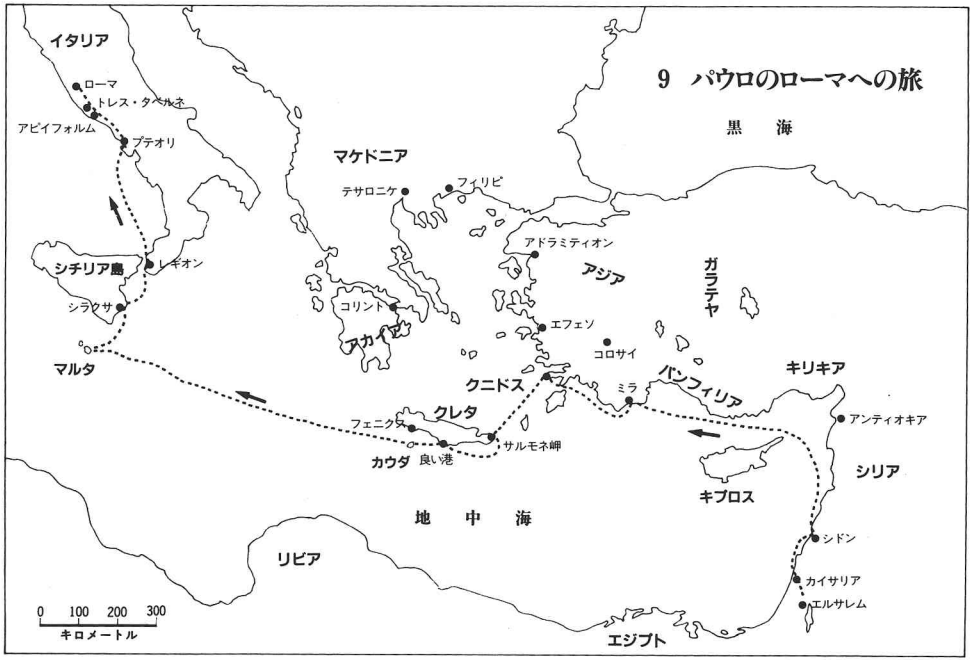


© The United Bible Societies 1987 「聖書 新共同訳」(日本聖書協会)より転載



© The United Bible Societies 1987

「聖書　新共同訳」(日本聖書協会) より転載



© The United Bible Societies 1987

「聖書　新共同訳」（日本聖書協会）より転載

著 者 紹 介

森　　勉（1931年生）日本福音ルーテル広島教会牧師
重野信之（1939年生）日本福音ルーテル名古屋教会牧師
大柴譲治（1957年生）日本福音ルーテル福山教会牧師
太田一彦（1953年生）日本福音ルーテル三鷹教会牧師
森　　優（1935年生）日本福音ルーテル熊本教会牧師
内藤文子（1957年生）日本福音ルーテル柴田教会牧師

表紙・裏表紙　写真「手のないキリスト像」
（日本ルーテル神学大学所蔵）
撮影　　望月　正夫

教会はキリストの体
—宣教第2世紀へ向けてエフェソ書に学ぶ—

1992年2月10日初版発行　　1992年4月10日2版発行

発行　日本福音ルーテル教会出版部
162 東京都新宿区市谷砂土原町1-1
電話（03）3260-8631

編集　宣教百年記念事業室
電話（03）3269-8208

発売元　株式会社　聖文舎
162　東京都新宿区新小川町6-29
電話（03）3269-7751

印刷・製本　精文堂印刷株式会社
116 東京都荒川区東尾久1-36-4
電話（03）3895-6211

定価　1,000円（本体971円　消費税29円）
ISBN 4-7921-5120-7 C0216 P1000E（日キ販）

宣教百年　聖書の学び運動

第２年度（1993年）

ルカによる福音書　――宣教論の視点から――

エフェソ書に続いて、全国で聖書の学びを展開しましょう。再び「手引書」が発行されます。どうぞお求めになってください。

百年を省みて、恵み、信仰、聖書に生かされているこの喜びを世界に伝えよう。

日本福音ルーテル教会宣教百年

1893
1993

日本福音ルーテル教会

宣教百年記念事業室

発売元 聖文舎
宣教百年記念「聖書の学び」 定価1000円(本体971円)
ISBN4-7921-5120-7 C0216 P1000E (日キ販)